

高等学校における「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した 授業改善と学習評価に関する研究

総合支援部高等学校支援課

研究の概要

令和4年度を目前に控えた今、新学習指導要領の理念を実現するためには、学校単位で、生徒や学校、地域等の実態を踏まえながら研究と実践を積み重ねていくことが求められる。本研究は、これまでの本課の取組を踏まえつつ、新学習指導要領の理念に則り、生徒の資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と学習評価について、研究協力校における各教科の研究を核に推進するものである。

本研究により、『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した授業設計診断の4項目」が指導と評価の一体的な改善に有用であることが明らかになった。また、全教科の教員から得られた質問紙調査の回答を統合し分析したことにより、『主体的・対話的で深い学び』の視点における指導と評価の一体的な改善を図るためには、カリキュラム・マネジメントの視点が欠かせないであろうこと」、「カリキュラム・マネジメントを促進していく上では、生徒に育成すべき資質・能力の明確化を行うことが重要な役割を担っているであろうこと」等の示唆を得た。

今後の課題としては、「主体的・対話的で深い学び」の視点における指導と評価の一体的な改善の更なる充実を図るために、各教科が生徒に育成すべき資質・能力の明確化、具体化をより進めていくための支援の在り方にある。総合教育センターが、令和3年3月と令和3年11月にそれぞれ公開した「学習評価の参考資料」を利用しながら、令和4年度以降の定期訪問や各種研修等において、この点について周知徹底を図っていく必要がある。

キーワード：主体的・対話的で深い学び、授業設計診断の4項目、カリキュラム・マネジメント、資質・能力の明確化、令和の日本型学校教育

目次

I	主題設定の理由	1
1	研究の背景	1
2	研究の目的	2
II	研究の仮説	2
III	研究の方法	2
1	研究の進め方	2
2	研究協力校	4
3	検証の方法	5
IV	研究の内容	7
1	各教科における研究	7
(1)	富士宮東高等学校（国語科）研究報告	7
(2)	浜松大平台高等学校（国語科）研究報告	10
(3)	御殿場南高等学校（地理歴史科・公民科）研究報告	13
(4)	清水南高等学校（地理歴史科・公民科）研究報告	15
(5)	小笠高等学校（数学科）研究報告	18
(6)	浜松西高等学校（数学科）研究報告	20
(7)	富岳館高等学校（理科）研究報告	22
(8)	浜松湖東高等学校（理科）研究報告	25
(9)	静岡中央高等学校（保健体育科）研究報告	27
(10)	清水南高等学校（芸術科）研究報告	30
(11)	浜松南高等学校（外国語科）研究報告	32
(12)	静岡高等学校（家庭科）研究報告	34
(13)	磐田農業高等学校（農業科）研究報告	37
(14)	浜松城北高等学校（工業科）研究報告	40
(15)	浜松商業高等学校（商業科）研究報告	43
2	質問紙調査結果	46
3	考察	48
V	研究のまとめ	50
1	研究の成果	50
2	今後の課題	51

高等学校における「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した 授業改善と学習評価に関する研究

総合支援部高等学校支援課

I 主題設定の理由

1 研究の背景

高等学校は、令和4年度入学生から、年次進行により新しい学習指導要領を実施する。図1は学習指導要領改訂の方向性を示したものである。新しい学習指導要領は、何を学ぶかとともに、何ができるようになるか、すなわち「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」を目指している。変化の激しい社会の中で、子どもたち一人一人が、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、予測できない変化に主体的に向き合い、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようになることが求められている。資質・能力の育成に当たっては、どのように学ぶかを重視し、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うこと、そして、子どもたちの学習状況を把握し、教員の指導や子どもたちの学習の改善に生かして行くための学習評価を充実させることが重要である。

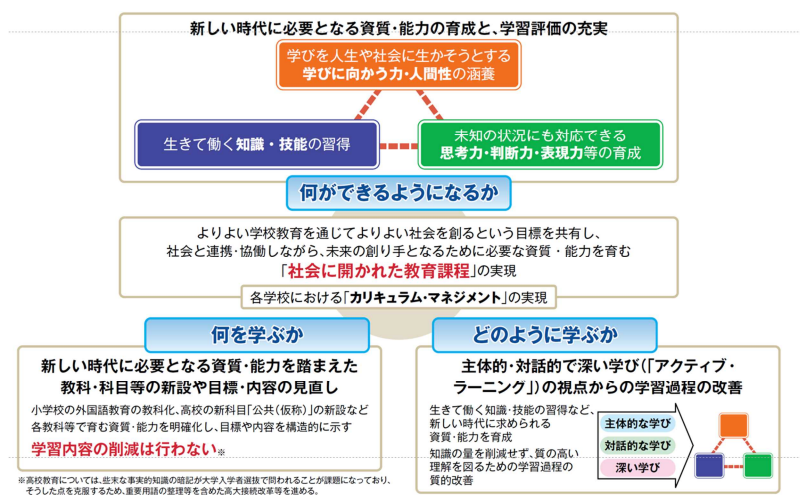


図1 学習指導要領改訂の方向性

これまで高等学校支援課は、図2に示すように、教育課程説明会や各種研修、定期訪問等の機会を通じて、学習指導要領の趣旨や内容の周知徹底を図ってきた。定期訪問等で学校を訪問すると、特に総合教育センターの研修や説明会にこれまで参加する機会が少なかった教員を中心に、「自分の教科で主体的・対話的で深い学びを実現するには具体的にどうすればよいか」、「観点別学習状況の評価をもっと充実させたい」、「主体的に学習に取り組む態度の評価が難しい」、「教員によって学習評価の考え方が大きく異なっている」などの声が聞かれた。令和4年度を目前に控えた今、新学習指導要領の理念を実現するためには、学校単位で、生徒や学校、地域等の実態を踏まえながら研究と実践を積み重ねていくことが求められる。本研究は、これまでの本課の取組を踏まえつつ、新学習指導要領の理念に則り、生徒の資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と学習評価について、研究協力校における各教科の研究を核に推進するものである。

新学習指導要領対応授業改善推進サポート研修 (R01,02,03)		定期訪問（全校全課程対象） 公開授業・教科別研修・年間指導計画 の確認・校内研修会
新学習指導要領対応授業力向上研修 (H28,29,30)		
教育課程説明会〔総則及び各教科等〕 (H30,R01,R02,R03)		年次別研修 初任者・２年次・６年次・中堅教諭等
教育課程研究委員会〔総則及び各教科等〕		
学校等支援研修	ICT活用 力向上研修	教科に係る希望研修 ☐ 授業設計診断を活用した「主体的・対 話的で深い学び」の授業づくり」 ☐ 生徒の学びを支援する学習評価 はじめ の一步 ☐ 各教科等に係る研修

図2 高等学校支援課の取組

2 研究の目的

新学習指導要領において生徒の資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と学習評価について、各教科の研究を核に進めることにより、県内高等学校の教員の理解と実践を促進する。

II 研究の仮説

『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した授業設計診断の4項目」を授業改善のための共通言語（共通の視点）とし、教員の理解促進と実践を進めることにより、「主体的・対話的で深い学び」の視点における指導と評価の一体的な改善が充実するのではないか。また、その際、教員の教科内カリキュラム・マネジメントを促進することが重要な役割を担うのではないかと。

III 研究の方法

1 研究の進め方

研究を推進するに当たっては、研究協力校の当該教科について、生徒や学校、地域等の実態に応じて授業改善と学習評価に係るテーマを設定した。その際、予め校長の意向を丁寧に確認するとともに、教科主任の教員とも懇談の機会を設け、学校のニーズや実態を丁寧に把握することに努めた。

各研究協力校の当該教科には、すべての教員に1冊ずつ、図3に示す「主体的・対話的で深い学び」実現のためのサポートブックを配布した。そこには「アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメント（リーフレット）」（図4）が示されている。研究協力校訪問を通して、『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した授業設計診断の4項目」における、「解決したい課題や問い」「考えるための材料」「対話と思考」「学習の成果」の4項目を授業改善のための教員間の共通言語（共通の視点）とし、教員の理解促進と実践を進めた。



図3 「主体的・対話的で深い学び」
実現のためのサポートブック

「アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメント」(リーフレット)

(A4親折8ページ)

表紙(表裏)

**アクティブ・ラーニングと連動させた
カリキュラム・マネジメント**

平日常用目標を実現するために、教育課程を編成し、それを実施・評価・改善していく取り組み

＜小学校、中学校、高等学校、特別支援学校共通版＞

教科横断的な視点から教育活動の改善を図る

アクティブ・ラーニング

新しい時代を切り拓く資質・能力を引き出し、高める

アクティブ・ラーニング

課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び

＜小学校、中学校、高等学校、特別支援学校共通版＞

子供たちが「どのように学ぶか」に焦点を当て、
●解決したい課題や問い ●考えるための材料 ●対話と思考 ●学習の成果
を意図して授業を設計しましょう！

アクティブ・ラーニングの視点からの授業設計診断

アクティブ・ラーニングの視点からの授業設計診断

本表は、「アクティブ・ラーニング」の観点から授業設計を診断するためのツールです。授業設計は「解決したい課題や問い」「考えるための材料」「対話と思考」「学習の成果」の4つの観点から行われます。各観点について、具体的な授業設計の要素を挙げており、それらを確認しながら授業設計を進めることができます。

項目	★	★★	★★★	assessment
解決したい課題や問い				
考えるための材料				
対話と思考				
学習の成果				

よりよい学級と社会を創る教室文化の診断

よりよい学級と社会を創る教室文化の診断

本表は、「よりよい学級と社会を創る教室文化」の観点から授業設計を診断するためのツールです。教室文化は「学習の意欲」「学習の態度」「学習の成果」の3つの観点から行われます。各観点について、具体的な教室文化の要素を挙げており、それらを確認しながら教室文化を創ることができます。

項目	★	★★	★★★	assessment
学習の意欲				
学習の態度				
学習の成果				

※総合教育センターのWebサイト (http://www.center.shizuoka-c.ed.jp/index.php?page_id=226) からダウンロードすることができます。

図4 「アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメント」(リーフレット)

2 研究協力校

研究協力校及び該当教科とテーマは以下のとおりである。当該校には、2年間継続して研究に御協力いただいた。研究協力校の皆様に、この場を借りて深くお礼申し上げる。

- (1) 富士宮東高等学校（国語科）
目標と指導、評価の一体化を意識した必修科目「言語文化」の年間指導計画の作成
観点別学習状況の評価の円滑な実施（総括的評価へ）
- (2) 浜松大平台高等学校（国語科）
観点別学習状況の評価の円滑な実施（総括的評価へ）
- (3) 御殿場南高等学校（地理歴史科・公民科）
地理歴史科・公民科の各科目において、学習評価のための取組を全ての教員が実践し、教科内で共有する
地理歴史科における「主体的に学習に取り組む態度」の評価に係る実践に基づいた研究
- (4) 清水南高等学校（地理歴史科・公民科）
指導と評価の一体化を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の実現と観点別学習状況の評価を実践するための評価計画を作り、年間指導計画に位置付ける
- (5) 小笠高等学校（数学科）
観点別学習状況の評価の円滑な実施
- (6) 浜松西高等学校（数学科）
観点別学習状況の評価の円滑な実施
- (7) 富岳館高等学校（理科）
観点別学習状況の評価の円滑な実施
- (8) 浜松湖東高等学校（理科）
観点別学習状況の評価の円滑な実施及び観点別学習状況の評価を反映させたテスト問題の作成
- (9) 静岡中央高等学校（保健体育科）
障害のある生徒に対する配慮を踏まえた授業実践と学習評価
指導と評価の一体化を図った授業実践と学習評価 ～単元計画表の作成、学習プリントの評価～
- (10) 清水南高等学校（芸術科）
新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業の開発と観点別学習状況の評価の充実
- (11) 浜松南高等学校（外国語科）
自己調整に基づく英語発信力の育成
- (12) 静岡高等学校（家庭科）
目標と指導、評価の一体化を意識した年間指導計画の作成
教科で育成したい資質・能力の明確化を図った指導計画と授業実践
- (13) 磐田農業高等学校（農業科）
カリキュラム・マネジメントへの理解を深め、グランドデザインを意識した授業設計を進めることによって組織全体の授業力向上を図るとともに学習評価を更に充実させる

(14) 浜松城北工業高等学校（工業科）

工業科における観点別学習状況の評価による授業改善～学習評価の理解と実践～

(15) 浜松商業高等学校（商業科）

観点別学習状況の評価の円滑な実施につながる「主体的・対話的で深い学び」が実現された授業実践事例を収集し共有化する

3 検証の方法

次ページに示す図5は研究協力校の教員に対して行った質問紙調査である。

令和2年度、令和3年度のそれぞれにおいて、年度当初、年度末に1回ずつ調査を実施した。質問①から質問⑤及び質問⑬、質問⑭については、カリキュラム・マネジメントの充実に関する質問である。先述したとおり、学習指導要領の改訂の中心にあるのは、予測困難な時代を見据え、授業を通して生徒が「何ができるようになるか」を明確にすることである。質問①から質問③では、カリキュラム・マネジメントの一連のプロセスにおいて最も重要であり、最初に着手すべき「目指す学校像や生徒の実態に応じて育成すべき資質・能力を明確化、具体化しているか、それらを教員間で共有しているか」について回答を求めている。質問⑬では、明確化、具体化された育成すべき資質・能力、すなわち目標を達成するために実施する指導（授業）と、その目標が達成されたかどうかを評価し、改善策を講じていくことの意義について、教員間で共通理解が図れているかを問うている。

質問⑥から質問⑭については、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した指導と評価の一体的な改善に関する質問である。授業設計診断の4項目に基づき、「解決したい課題や問い」「考えるための材料」「対話と思考」「学習の成果」のそれぞれに関する教員の実践状況や考えを把握しようとするものである。質問⑮、質問⑯については、より良い教室文化の醸成に関する問いである。

全ての質問項目について6件法で実施し、令和2年度及び令和3年度それぞれの年度当初と年度末の平均値に統計的な有意差が認められるかどうかについて検証、分析する。また、重回帰分析を行い、カリキュラム・マネジメントの充実に関する各質問項目と「主体的・対話的で深い学び」の視点における指導と評価の一体的な改善に関する各質問項目について、事象間の関係性を詳細に分析する。

「主体的・対話的で深い学び」とカリキュラム・マネジメントに関する調査					
				実施日	令和 年 月 日
				学校名	
				教科名	
				氏 名	
■ 次の設問について、日頃の教育活動で意識している程度をご回答ください。（①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳以外は御自身について回答）					よく当てはまる ←————→ 全く当てはまらない
①	（所属校では、）目指す学校像に基づき、自校の生徒に育成すべき資質・能力を明確化している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
②	（所属校では、）教科・学年・分掌等を超えて、自校の生徒に育成すべき資質・能力を共有している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
③	自校の生徒に育成すべき資質・能力を基に、教科で生徒に育成すべき資質・能力を具体化している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
④	教科で生徒に育成すべき資質・能力を踏まえて、単元の目標を設定し、単元を構想している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑤	生徒の実態に合わせて、課題（問い）への興味、関心や難易度について吟味している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑥	一人の力では解決が難しく、他者と協働しなければならないような課題（問い）を設定している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑦	授業実施前の設計段階において、課題（問い）に対する生徒の反応、対話や、答えについて想定している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑧	全ての生徒が対話等の学習活動に参加するために必要な材料を事前に準備している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑨	複数の視点や立場から考え、比較、統合することで解決策や答えにつながるような材料を準備している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑩	生徒の対話を促進する教室環境（グループ編成や座席配置等）を整備している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑪	生徒の思考を可視化する教具（ＩＣＴ・ホワイトボード等）を工夫している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑫	対話において、生徒同士の建設的なやり取りがなされるよう工夫している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑬	生徒が自ら学びを振り返り、自己の成長を把握するために、自分の言葉で表現させる場を設けている。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑭	課題（問い）に取り組むことにより、得られた知識・技能の活用範囲が実社会や実生活まで広がるのが想定できる授業になっている。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑮	生徒が課題（問い）に対する授業開始時と授業終了時の考えをまとめる機会を設定している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑯	授業実施後に、生徒の課題（問い）に対するあらわれ（授業開始時・学習の過程・授業終了時）を比較・分析し、次の授業に生かしている。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑰	互いの失敗や間違いが許され、わからないことを積極的に言える雰囲気づくりを意識している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑱	一人ひとりが学びを深める大事な仲間であると思える学習集団をつくっている。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑲	（所属校では、）校内研修により、教員全員で授業改善に取り組む風土がある。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
⑳	（所属校では、）校内研修により、生徒主体の学びを大切にしようとする考え方を共有している。				6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
■（研究テーマ）について、現時点における印象や考えを自由にお書きください。					

図５ 「主体的・対話的で深い学び」とカリキュラム・マネジメントに関する調査

Ⅳ 研究の内容

1 各教科における研究

各研究協力校（当該教科）における主体的な研究の推進に配慮しながら、本課の教科担当指導主事が教科研修会や研究授業、研究協議等への支援を行った。

研究テーマを設定するに当たっては、学習指導要領の改訂を踏まえ、当該教科の現状と課題を分析した。その分析に基づき、年度ごとの到達目標を設定した。

各年度末には、当該年度の研究実績及び成果と課題をまとめた。その上で、今後の展望を記述した。ここでは、各教科の研究についてそれぞれ報告する。図中の■は本課の教科担当指導主事による学校訪問、○は研究協力校による研究を表す。なお、研究成果物は巻末資料として示す。

(1) 富士宮東高等学校（国語科）研究報告

1 研究テーマ

(1) 令和2年度

目標と指導、評価の一体化を意識した必履修科目「言語文化」の年間指導計画の作成

(2) 令和3年度

観点別学習状況の評価の円滑な実施（総括的評価へ）

2 現状と課題

(1) 令和2年度

学習指導要領の改訂に伴い、令和4年度入学生より必履修科目「現代の国語」「言語文化」の履修が始まる。併せて、生徒指導要録に「観点別学習状況の評価」を記載する必要がある。同校においても、各教員が生徒の学習状況を観点別に評価することについて理解を深めた上で、必履修科目の目標に規定された資質・能力の育成に向けて、単元ごとに目標や言語活動、評価方法等を明確にした年間指導計画を検討、作成する必要がある。

(2) 令和3年度

令和2年度は、評価規準と評価方法について研究を行った。教科内で議論を深め、指導と評価の一体化について理解を深めることができた。令和4年度入学生から必履修科目「現代の国語」「言語文化」の履修が始まる。単元ごとに目標や言語活動、評価方法等を明確にした年間指導計画を検討、作成する必要がある。

3 到達目標

(1) 令和2年度

目標と指導、評価の一体化を意識した単元構想について理解している。

目標と指導、評価の一体化を意識した「言語文化」の年間指導計画を作成している。

(2) 令和3年度

目標と指導、評価の一体化を意識した単元構想について理解を深めている。

目標と指導、評価の一体化を意識した「言語文化」の年間指導計画及びそれに基づく単元の指導と評価の計画を作成している。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容
4月17日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談（趣旨説明・意向確認） (2) 教科主任との打合せ（趣旨説明・教科の実態把握・意向確認）
6月19日	■研究協力校訪問② (1) 教科主任との事前の打合せ (2) 教科研修会（研究計画書（案）の説明及び協議、事前アンケートの実施）
12月8日	○教育課程研究委員会の開催 学習指導案（授業設計診断4項目を含む）、ワークシート、ループリック等の検討
12月25日	○教科研修会の開催 学習指導案（授業設計診断4項目を含む）、ワークシート、ループリック等の検討
1月22日	■研究協力校訪問③ (1) 研究授業 (2) 教科主任との打合せ（研究授業の振り返り、次回教科研修会の内容確認）
1月28日	■研究協力校訪問④ (1) 教科研修会（観点別学習状況の評価、研究の成果と課題） (2) 教科主任との打合せ（教科研修会の振り返り、次年度研究の確認） (3) 校長懇談（研究報告）

(2) 令和2年度成果と課題

学習指導要領の改訂を見据え、生徒の資質・能力の確実な育成を意識しながら、令和3年度末までに必履修科目「言語文化」の年間指導計画を作成する。研究期間の1年目に当たる令和2年度は、教科内において、目標と指導、評価の一体化を意識した単元構想について理解している状態を目指した。

授業者が考案した単元構想を、「主体的・対話的で深い学び」の実現、目標と指導、評価の一体化の視点から教科内で検討したことは、教科内カリキュラム・マネジメントの推進という点での成果と考える。検討の過程では、「考えるための材料」の選定や工夫、小テストやワークシートの内容、評価基準等について改善案が示された。

研究授業後の教科研修会では、抽出した生徒のワークシートを基に、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の各観点を評価する演習を行った。演習後の振り返りから、ループリックの具体と抽象のバランスを考える必要がある、学習評価は試行を重ねることで妥当性の担保に近づく等の意見が挙がった。次年度の研究に繋がる振り返りがなされたと考える。

課題は、観点別学習状況の評価の生徒指導要録への記載を踏まえ、記録に残す評価に重きを置いたため、形成的評価への意識を高めることができなかったことである。改めて、目標に準拠した評価、指導と評価の一体化の考え方を確認する必要がある。また、研究における実践が一回に留まったことで、学習評価に係る教員の経験値を増すという点において十分でなかった。

ことも課題である。複数回の実践を行うことで、次年度の研究へのより円滑な接続が期待できたであろう。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
5月19日	■第1回訪問 (1) 校長懇談（趣旨説明・意向確認） (2) 国語科との打合せ ・趣旨説明・教科の実態把握 ・意向確認 ・研究計画書(案)の説明及び協議 ・事前アンケートの実施	・研究計画書(案)とともに目標と指導、評価の一体化、年間指導計画及び単元の指導と評価の計画の考え方について説明した。
5月～8月	○研究協力校における研究 (1) 単元構想に基づく授業実践 (2) 観点別学習状況評価の実施 (3) 評価検討会の実施	・第2回訪問時に評価検討会を実施する予定であったが、コロナ禍により訪問は中止。研究協力校の教員のみで実施した。
9月28日	■第2回訪問（オンライン） (1) 評価検討会へのフィードバック (2) 「単元の指導と評価の計画」作成のための情報提供	・評価検討会で明らかになった課題について、フィードバックを行った。
10月～12月	○研究協力校における研究 (1) 「言語文化」年間指導計画の作成 (2) 「単元の指導と評価の計画」の作成	
12月23日	■第3回訪問 (1) 「単元の指導と評価の計画」作成への助言 (2) 情報交換	・「単元の指導と評価の計画」作成時に明らかになった課題についてフィードバックを行った。
1月27日	■第4回訪問 (1) 修正した「単元の指導と評価の計画」作成への助言 (2) 事後アンケートの実施 (3) 校長懇談（研究報告）	・第3回訪問での助言を基に修正した「単元の指導と評価の計画」に対するフィードバックを行った。

(4) 令和3年度成果と課題

第1回訪問時及び第4回訪問時に実施したアンケート結果の比較から、新学習指導要領で示す国語科で育成すべき資質・能力への理解と、それに基づく授業改善が進んでいることが推察される。本年度、取り組んだ「年間指導計画」及び「単元の指導と評価の計画」の作成には、新学習指導要領への理解が不可欠であり、作成を通して理解を深め、それを意識した授業実践を展開したと考えられる。

また、自由記述欄では「観点別評価の導入により、各教材と学習指導要領の指導事項とのつながりが見えやすくなり、授業における目標が立てやすくなった」という記述が見られ、上記の分析に対する裏付けが得られた。

その他、若手教員ほど大きな伸びが見られる傾向にあることが明らかとなり、本研究への協力、経年研修等を通して国語科教員に求められる資質・能力を向上させていることが示唆

された。

5 今後の展望

自由記述欄では、科目『国語総合』で扱っていた教材に目が向いてしまい、それに強引に指導事項を当てはめてしまう傾向にある」という記述が見られた。事実、第3回訪問の時点では教材ベースで年間指導計画を作成していたために、教材と指導事項との間で齟齬が生じており、「指導と評価の一体化」の原則から外れるという事態が起こっていた。

新学習指導要領の着実な実施のためには、「国語総合」が「現代の国語」と「言語文化」の2科目に分けられたことの意義を改めて確認するとともに、それぞれの科目の目標や指導事項を正確に理解することが不可欠である。「国語科では指導主事の助言があり、皆、理解が深まっている」との記述も見られたが、裏を返せば、このような指導・助言を行う機会の少ない学校では道半ばであることは想像に難くない。

本研究を通して得られた知見を全県に広げることで、各校で新学習指導要領に基づく指導と評価が確実に行われるよう尽力する必要がある。

図6 富士宮東高等学校（国語科）研究報告

(2) 浜松大平台高等学校（国語科）研究報告

1 研究テーマ

観点別学習状況評価の円滑な実施（総括的評価へ）

2 現状と課題

(1) 令和2年度

「国語表現」の授業では、話すこと・聞くこと及び書くことの能力の育成を目標としているが、評価方法が各授業担当者によって異なることが課題として挙げられている。教科内で観点別学習評価についての検討を進め、学習評価の妥当性と信頼性を高める必要がある。

また、令和4年度入学生より必修科目「現代の国語」「言語文化」の履修が始まる。単元ごとの目標や言語活動、評価方法等を明確にした年間指導計画を検討、作成する必要がある。

(2) 令和3年度

令和2年度は、評価規準と評価方法について研究を行った。教科内で議論を深め、指導と評価の一体化について理解を深めることができた。

令和4年度入学生から必修科目「現代の国語」「言語文化」の履修が始まる。単元ごとに目標や言語活動、評価方法等を明確にした年間指導計画を検討、作成する必要がある。

3 到達目標

(1) 令和2年度

学習指導要領の規定に沿って評価規準を作成し、適切に評価方法を運用している。

(2) 令和3年度

観点別学習状況の評価を、教師の授業の改善や生徒の学習の改善に生かしている。

（観点別学習状況の評価から評定への総括について、組織的・計画的に取り組んでいる。）

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容	備考
6月2日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談(趣旨説明及び意向確認) (2) 教科主任との打合せ(趣旨説明及び研究内容に関する協議)	・科目「国語表現」において、「書くこと」の領域を扱うことの確認 ・観点別学習状況の評価について、評価規準や評価時期の研究
7月7日	■研究協力校訪問② (1) 研究の方向性について確認 (2) 学習評価研修会	・思考・判断・表現を評価する際、レポート等の成果物の評価にルーブリックを活用することの研究 ・3名の授業担当者による評価の実践
9月～11月	○研究協力校における研究 (1) 授業及び評価の実践 (2) 授業計画と指導計画の作成	
12月1日	■研究協力校訪問③ (1) 授業実践 (2) 評価の実践	・授業で作成された成果物を使い、ルーブリックをもとに思考・判断・表現の評価の目線合わせ
12月～1月	○研究協力校における研究 (1) 授業及び評価の実践 (2) 授業計画と指導計画の作成	
1月19日	■研究協力校訪問④ (1) 実践の成果と課題 (2) 次年度の研究の展望	・1年間の成果と課題についての協議

(2) 令和2年度成果と課題

単元の目標に準拠した評価規準を設定することで、目標の実現に向けた単元構想の工夫が生み出された。また、身に付けさせたい資質・能力が明確になり、その育成に向けた授業が展開されるようになった。

「書くこと」の領域を扱った単元において、ルーブリックを用いた評価を行った。ルーブリックの作成に時間を要したが、評価時の指標として効果的に活用することができた。また、アンカー作品を用いた目線合わせにより、授業担当者間のずれを解消することができ、学習評価の妥当性と信頼性の向上につながった。

協力校訪問において公開授業を実施し、生徒が提出した小論文を基に評価検討会を行った。「思考・判断・表現」の評価規準には「根拠を用いた文章の作成」について示されているが、評価規準に到達している成果物が見られなかった。評価検討会の参加者から、授業における「根拠を用いた文章の作成」に向けた活動の不足について指摘があり、授業担当教諭も深く納得していた。学習評価と教師の授業改善とのつながりについて課題意識が共有され、指導と評価の一体化について理解を深めることができた。

課題として3点挙げられる。1点目としては、単位制ということもあり、それぞれの授業が単独で行われている状況の中、国語科として共通理解を図っていくことの難しさがある。また、指導と評価の一体化を目指した年間指導計画の作成により、一部の教員への負担が増すことが考えられる。

2点目として、ABCを点数に換算して行う総括を試行しているが、10段階で対応することの困難さがある。校内における議論が必要とされる部分であり、情報を収集しながら対応を考えていく。

3点目として、主体的に学習に取り組む態度の評価について、学校の特質や生徒の実態を考慮しつつ、どのような方法を用いていくか、今後も検討を進めていく。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
5月17日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談(研究の趣旨説明・意向確認) (2) 教科主任、担当教員との打合せ(趣旨説明・教科の実態把握)	・前年度の成果と課題について確認 ・研究計画の確認
7月29日	■研究協力校訪問② (1) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の具体に関する協議 (2) 「評定」への総括に関する協議	・訪問時まで授業実践 ・生徒の成果物を準備 ・「評定」への総括に関する資料
8月～9月	○研究協力校における研究 (1) 評価問題の検討 (2) 評価検討会	・定期試験における評価問題の検討 ・評価に関する教科会議の実施
12月～1月	○研究協力校における研究 (1) 授業及び評価の実践 (2) 年間指導計画の作成	・令和4年度採用の教科書を用いて作成 ・評価方法の検討
1月24日	■研究協力校訪問③(オンライン会議) (1) 年間指導計画の点検 (2) 実践の成果と課題	・2年間の成果と課題について協議

(4) 令和3年度成果と課題

「話すこと・聞くこと」の領域を扱った単元において、生徒の実態や業務の効率化を考慮し、スピーチ原稿での評価を実施した。また、「知識・技能」の観点では、定期試験における評価について検討を行い、習得した知識を生きたものとして活用できているかを問う良質な問題を作り上げた。

また、新科目「現代の国語」を想定して検討を行った。学習の過程が分かる「一枚ポートフォリオ」と単元末の「振り返りシート」を作成し、粘り強い取組を行おうとしている側面と、自らの学習の調整をしようとする側面の評価を試みた。単に授業の記録や感想のみを書き残すのではなく、育成を目指す資質・能力を授業者が思い描き、ワークシートに反映させることで、評価の妥当性と信頼性を向上させることができた。

令和4年度から開始する新科目「現代の国語」と「言語文化」について、使用予定の教科書を用いて年間指導計画を作成した。教科内で学習指導要領の内容を共有することにより、領域の授業時間数や教材の取扱いに配慮しつつ、指導事項の漏れがないように作成することができた。

5 今後の展望

指導と評価の一体化を実現するためには、年間指導計画の作成に向けた組織的な検討が必要不可欠である。学習指導要領の内容と生徒の実態を照らし合わせた年間指導計画の作成に向け

て、引き続き支援していく。また、学習の過程や系統性を意識した指導事項の配列について、今後も丁寧な説明を続けていく。

図7 浜松大平台高等学校（国語科）研究報告

(3) 御殿場南高等学校（地理歴史科・公民科）研究報告

1 研究テーマ

(1) 令和2年度

地理歴史・公民科の各科目において、学習評価のための取組（①～⑤いずれか）を全ての教員が実践し、教科内で共有する。

- ① 「思考・判断・表現」を問う定期試験問題の作成と評価の実践
- ② 三つの観点による評価方法やバランスの妥当性の検証
- ③ リフレクションシートを活用した「主体的に学習に取り組む態度」の育成と評価
- ④ ICT機器を活用した「知識・技能」の定着と評価方法の検討
- ⑤ 研究授業の実施と研究協議

（授業で目指す資質・能力の育成につながる学習評価の方法について）

(2) 令和3年度

地理歴史科における「主体的に学習に取り組む態度」の評価に係る実践に基づいた研究

2 現状と課題

(1) 令和2年度

学習評価（形成的評価）の取組には教員間で差が見られる。そのため、それぞれの教員の授業や評価実践について共有し、共通認識を形成していくことが課題である。

(2) 令和3年度

観点別学習状況の評価について、理念や概要についての理解は進みつつあるが、地理歴史科教員の人員に変更があったことから、改めて基本事項について確認する必要がある。また、令和4年度に向けて「主体的に学習に取り組む態度」の観点についての実践的な取組を通じて、評価規準の設定、指導評価計画の作成方法について、地理歴史科内での共通理解を図ることが課題である。

3 到達目標

(1) 令和2年度

観点別学習状況の評価の趣旨や方法について共通理解を図り、各教員がそれぞれ担当する科目の目標や特性に応じた観点別学習状況の評価の実践を行っている。また、実践経過や結果を教科内で共有、検討している。

(2) 令和3年度

「主体的に学習に取り組む態度」について、地理歴史科で育成を目指す資質・能力を踏まえた評価規準の設定及び新科目における単元指導評価計画を作成する。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容
6月18日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談 (2) 教科主任、研修主任との打合せ

	研究の趣旨説明、教科の意向確認、現状と課題の聞き取り、協力依頼（アンケート、公開授業、授業研究会）第2回以降の日程調整
6月30日	■研究協力校訪問② (1) 研究の趣旨、内容の説明と協議 (2) 学習評価の在り方に関する研修、説明スライド資料による説明と質疑応答・協議
8月21日	■研究協力校訪問③ (1) 教科研修会 研究テーマ・方法の策定 地 理：単元評価計画の作成 思考力・判断力・表現力等を評価するための問いの設定と記述の評価 世界史：思考力・判断力・表現力等を問う定期試験問題の作成 公 民：ICT機器の活用、形成的評価への応用論述課題の評価のためのルーブリック作成
10月27日	■研究協力校訪問④ (1) 研究授業 地理B（2年）「農林水産業と食料問題」 世界史B（2年）「100年戦争とバラ戦争」 現代社会（1年）「生命科学と情報技術の課題」 (2) 研究協議
2月9日	■研究協力校訪問⑤ (1) 教科研修会 研究の振り返り、アンケート結果の分析、次年度の展望

(2) 令和2年度成果と課題

観点別学習状況の評価の趣旨や方法の理解と教科内カリキュラム・マネジメントの推進については、6月実施の教科研究会において、当該事項の説明及び研究協議を行うことで、教員の理解を深めることができた。また、各回の協議を通じて、教員全体で目標や取組を共有することができた。

①単元指導・評価計画の作成、②思考力・判断力・表現力等を育成、評価するための学習課題の設定、③思考力・判断力・表現力等を評価するための定期試験問題の作成と実施、④授業における記述を評価するためのルーブリック作成、⑤評価の実施及び検証、⑥ICT（Google Classroom）を活用した記述課題の評価、これら①～⑥の取組を通じて、講義中心であった授業方法を見直すきっかけとなり、対話や記述等、生徒の活動を多く取り入れた授業の必要性を感じることができた。評価を充実させることが授業改善につながることを実感することができた。⑥の実践では、Google Classroomの活用により、効率的に学習評価を行うことを可能にするだけでなく、評価結果を生徒にフィードバックしたり、授業中の意見共有の場面を設定したりする上でも有効であることが実証できた。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
4月26日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談 (2) 地理歴史・公民科教員打合せ	・研究の趣旨の確認 ・研究協力校の現状と課題の把握 ・学習評価説明動画の視聴依頼
8月24日	■研究協力校訪問②（オンライン） (1) 観点別学習状況の評価に関する説	・地理歴史科で育成を目指す「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」

	明 (2) 「主体的に学習に取り組む態度」 の評価実践に向けた協議	及び「学びに向かう力、人間性等」 の確認 ・「主体的に学習に取り組む態度」の 評価事例の確認、2 学期における実 践に向けての協議
8 月～10 月	○研究協力校における研究 (1) 単元評価計画の作成 (2) 単元を通した評価実践 (3) 観点別学習状況の評価を着実に実 施するための定期試験問題の検 討・作成	・「世界史 B」における評価計画の作 成及び実践 ・「地理 B」における定期試験問題の 作成及び、観点別評価を行うための 分析
10 月 18 日	■研究協力校訪問③（オンライン） (1) 実践報告及び協議 (2) 新科目における単元構成の理解	・生徒の主体的な学習を促すための 「学習の見通し」「成果の蓄積」「学 習の振り返り」の機会の設定につい て協議 ・育成を目指す資質・能力を明確化し、 評価するための定期試験問題と評価 における判断の基準の確認
12 月	○アンケートの実施	
2 月	■研究協力校訪問④（オンライン） (1) 研究成果の振り返り	

(4) 令和 3 年度成果と課題

学習評価の考え方や方法等について教科内で協議することを通して、教科内カリキュラム・マネジメントの推進を図ることができた。単元の評価計画作成及び評価の実践では、「主体的に学習に取り組む態度」を効果的に評価するための手立てを得ることができた。また、各単元で生徒が「学習の見通し」、「成果の蓄積」、「学習の振り返り」を行う機会を計画的に設定することは、教員が生徒の学習成果を評価することだけでなく、生徒の主体性を引き出し、個々の興味・関心に基づいた学習を促すことを可能にするものであることが明らかとなった。観点別に評価するための定期試験問題の検討では、各科目における見方・考え方を働かせ、資質・能力を育成することができる問いとなるよう、出題内容や形式等について今後の更なる検証が必要である。

5 今後の展望

研究の成果を基に、「地理領域科目」と「歴史領域科目」に共通する学習評価の在り方について理解を深めるための研修等を実施していく。また、それぞれの科目の特質に応じた学習評価の実践事例や、定期試験の出題例等について収集・分析し、発信していく。

図 8 御殿場南高等学校（地理歴史科・公民科）研究報告

(4) 清水南高等学校（地理歴史科・公民科）研究報告

1 研究テーマ

指導と評価の一体化を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の実現と観点別学習状況の評価を実践するための評価計画を作り、年間指導計画に位置付ける。

2 現状と課題

地歴・公民科では学習内容と授業時数との関係で講義型の授業が多くなっているが、新課程においてどのように「主体的・対話的で深い学び」を目指して、対話を取り入れた場面と説明をする場面を配分するのか、また、そうした授業を通して各観点をどのような場面で評価するのかなどを整理することが必要であると考えている。

3 到達目標

公民科の新科目「公共」の年間指導計画を作成し、その中に單元ごとの観点別評価計画が組み込まれるようにする。（令和3年度末）

上記目標の達成のため、令和2年度段階で公民科の科目において、「公共」につながる單元を一つ設定し、評価計画の作成とそれに基づいた授業実践を行う。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容	備考
6月2日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談（研究の趣旨説明・意向確認） (2) 教科主任と打合せ	・事前アンケートの実施
9月3日	■研究協力校訪問② (1) 教科研修会 ア 研究計画に基づく協議 イ 評価に関する研修会 (2) 授業担当者と打合せ	・中等部社会科、高等部地歴公民科の教員を対象とした、学習評価についての講義と単元の評価計画を作成する演習 ・授業担当者にその計画に位置付けられた「思考・判断・表現」の観点を評価する授業実践を計画することを依頼
11月4日	■定期訪問 (1) 校長懇談 (2) 教務主任懇談 (3) 公開授業 (4) 校内研修会 ＊校内研修会テーマ「学習評価」	・学習評価についての講義及び現在のシラバスにある内容について「思考・判断・表現」の評価を目指した授業と評価規準を設定する演習の実施
11月20日	■研究協力校訪問③ (1) 研究授業 (2) 研究協議	・校内の授業公開週間である「ちゃんとみ週間」の一環として研究授業を実施 ・研究協議では評価につながる授業の位置付けと具体的な評価につなげる方法について協議
1月28日	■研究協力校訪問④ (1) 教科研修会 ア 研究の振り返り	・事後アンケートを実施

(2) 令和2年度成果と課題

「政治・経済」では「公共」につながる單元「財政の仕組み」において授業実践を行い、

その授業における「知識・技能」の評価をどのような評価規準で評価するのか、実際の生徒の記述から評価の実践を行った。令和2年度は、観点別学習状況の評価についての考え方を理解し、実際の評価規準を作成することとそれに基づき生徒の記述を評価をすることにより、評価の実態を把握することができた。しかし、単元の評価計画など検討できなかった部分がある。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
5月28日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談（研究の趣旨説明・意向確認） (2) 教科主任と打合せ	・事前アンケートを実施
9月22日	■研究協力校訪問② ＊オンラインにて実施 (1) 教科研修会 ア 『評価と指導の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（国立教育政策研究所）の内容説明 イ 研究計画に基づく協議 ウ 評価に関する質疑・応答 (2) 授業担当者と打合せ	・「指導と評価の計画」の作成についてセンター指導主事より助言
11月2日	■研究協力校訪問③ (1) 研究授業 (2) 研究協議 ア 「主体的に学習に取り組む態度」の評価について	・研究授業を行い、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の観点の評価 ・研究協議では、実際の評価につなげる評価の判断の基準等についてセンターより助言
1月25日	■研究協力校訪問④ (1) 教科研修会 ア 観点別学習状況の評価に向けた課題等の整理 イ 地歴公民科の新科目の構造とそれを踏まえた観点別学習状況の評価について協議 (2) 校長懇談	・2学期に試行した観点別学習状況の評価の結果を基に協議し、「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法についてセンターより助言 ・地歴公民科の新科目の構造を説明し、指導と評価の計画を作成する際の考え方についてセンター指導主事より助言

(4) 令和3年度成果と課題

「高等学校学習評価の参考資料」（総合教育センター）、『評価と指導の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（国立教育政策研究所）及び「思考・判断・表現」・「主体的に学習に取り組む態度」の観点の評価する研究授業を基に協議を進めることで、学習評価の考え方について理解を深めることができた。授業実践では、社会的な見方・考え方を働かせ、生徒同士の対話を通して思考を深める場面を設定し、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」を見取り、評価していく工夫が見られた。

「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関して、教員の負担や評価の妥当性等を考慮し、評価の場面や評価の方法についてより一層の研究が必要である。そのためには各科目の構造を理解した上で単元の指導と評価の計画や年間指導計画を立てること

が重要であるが、今回の研究ではそれらについて十分に協議することができなかった。

5 今後の展望

研究の成果を基に、「指導と評価の一体化」への理解が深まり、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る授業改善が進んでいくことが期待できる。

図9 清水南高等学校（地理歴史科・公民科）研究報告

(5) 小笠高等学校（数学科）研究報告

1 研究テーマ

観点別学習状況の評価の円滑な実施

2 現状と課題

(1) 令和2年度

観点別学習状況の評価について平成30年度より研究を進めている。数学科では、数学Ⅰについて单元ごとワークシートを作成し、ループリックにより評価することに取り組んでいる。共通ワークシートを作成し活用することを目指していたが、教員が持つ教材観がそれぞれ異なり、教科として共通の取組が課題である。

(2) 令和3年度

教員の教材観には異なる部分があるが、ワークシートに合わせて授業を行う中で、観点別学習状況の評価についての共通認識を形成することができた。問いの設定が課題であり、前年度に実施したワークシートについて、問いと評価基準を改善しながら取組を継続していく。

3 到達目標

観点ごとの評価方法を整理し、教科としての評価計画を立てている。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容	備考
4月	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談（研究の趣旨説明・意向確認） (2) 教科主任との打合せ（研究の趣旨説明・教科の実態把握・意向確認）	
5月～8月	○研究協力校における研究 ・生徒の現状を把握した上で、数学科として生徒に付けさせたい力を明確にする。 ・数学Ⅰ「二次関数」における各单元において、思考力、判断力、表現力等を育成する場面、問いを教科として作成する。	・思考力・判断力・表現力等評価する問いは、練習問題ではなく、問題を解決する過程において大切となる本質的な内容とすることを確認 ・言葉だけでなく、数式、図、グラフ、表を用いて記述させることを確認
8月	■研究協力校訪問② (1) 問いに関する協議	・研究協力校が作成した問いについて総合教育センターより助言

	(2) 研究の方向性について確認	
9月～10月	○研究協力校における研究 ・授業及び評価の実践	
12月	■研究協力校訪問③ (1) 実践後の成果と課題 (2) 来年度研究の方向性	・池新田高等学校数学科教員2人が協議に参加

(2) 令和2年度成果と課題

数学Ⅰ「二次関数」における各単元において思考力、判断力、表現力等を育成するための問いを作成し、教科内で共通認識の下、授業及び評価を実践した。また、「評価が変われば、授業が変わる」という認識の下、教科共通のワークシートを作成することにより、ワークシートの内容を意識して授業を実践するようになった。生徒には、事前に「記述した内容を評価する」ことを伝えた。生徒は想像以上に記述することができた。定期試験とは違い、短時間だからこそ粘り強く取り組むことができた。

定期試験では高得点を取ることができない生徒の中で、A評価となる生徒が見られ、生徒の見方が変わった。また、これまでの定期試験等では、2次不等式が解けることを重視していたが、ワークシートでは不等式とグラフの関係を問いとした。指導後に生徒に大切だと感じてほしい内容を問いにすることにより、定期試験問題の改善につながるヒントを得た。

C評価の割合の大きさが一つの課題として挙げられる。生徒の実態を踏まえた問いやループブリックの設定について検討することに加えて、指導過程についても振り返りたい。また、ABC判定における負担の大きさと評価者間のずれについては、評価における負担軽減を意識して、評価基準（ループブリック）の見直しを図ることが求められる。負担軽減のために、さらに評価場面を精選することも考えられるが、評価者間にずれがある以上、評価場面はある程度確保した方がよい。また、繰り返し記述をさせることにより、生徒の表現力も向上すると考える。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
5月	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談（挨拶・趣旨説明） (2) 教科主任との打合せ	
5月～8月	○研究協力校における研究 ・生徒に付けさせたい力を明確にする。 ・数学Ⅰ「二次関数」における各単元において、思考力、判断力、表現力等を育成する場面、問いを教科として作成する。	・思考力、判断力、表現力等を評価するための問いを設定 ・問いは、練習問題ではなく、問題を解決する過程において大切となる本質的な内容とすることを確認
8月	■研究協力校訪問② (1) 問いに関する協議 (2) ICTを活用した評価方法の検討	・指導主事より助言 ・ICTを活用した評価方法の計画について研究協力校から説明
9月～10月	○研究協力校における研究 ・授業及び評価の実践	
10月	■研究協力校訪問③ (1) 実践後の成果の共有	・授業及び評価の実践状況についての共有
12月	■研究協力校訪問④ (1) 実践後の成果と課題	・授業及び評価の実践状況についての共有

1 月	■研究協力校訪問⑤ (1) 校長懇談（挨拶・研究報告）	・事後アンケートを実施
-----	---------------------------------------	-------------

(4) **令和3年度成果と課題**

成果の1点目は、令和2年度に実施した思考力、判断力、表現力等を育成するための問いと評価基準を検証し「思考・判断・表現」の評価を行ったことと、それらの問いを利用して、生徒の記述から「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行ったことである。実践した教員から「生徒に身に付けさせたい資質・能力をより意識することで授業の質が変わり、生徒に分かってほしいことを問えるようになった。」という声を聞くことができた。

成果の2点目は、ICTを利用して評価を行ったことである。Googleフォームを用意し、生徒はそこに解答を入力した。キーワードを決めておき、1次評価を出してから教員が内容を確認して評価を行った。今まで通り最初から教員が解答を評価する方法と両方行い効果を検証することができた。時間が大幅に短縮されたこと、重点を置く点を教員間ですり合わせていくことで評価基準の精度が上がったこと、生徒への支援策の検討につながった点が主な成果であった。

課題の1点目は、授業での生徒間の話し合い等の活動が与える影響と評価をどのように捉えるのかであった。評価の上で、教室環境をどのように扱うのかを検討する必要があると考える。

課題の2点目は、今回の実践は単語抽出機能を用いたものであったため、数学の試験では活用が難しい単元が多く、問題の形式を工夫する必要があるという点である。

5 今後の展望

教科としてどこまでの理解を生徒に求めるのかの見極めと問題作成の工夫が、適切な評価を行う上で重要になると考える。生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にした上での問いや評価方法の研究を引き続き行っていくことにより、評価基準の質の向上や生徒へのよりよい支援策の構築等が期待できる。

図 10 小笠高等学校（数学科）研究報告

(6) 浜松西高等学校（数学科）研究報告

1 研究テーマ 観点別学習状況の評価の円滑な実施
2 現状と課題 (1) 令和2年度 令和元年度に学校独自で観点別学習状況の評価の研究（テストの出題形式）を行い、令和2年度がそのスタートの年である。評価の方法についての検証を重ね、令和4年度に向けて確立していく必要がある。 (2) 令和3年度 令和元年度に学校独自で観点別学習状況の評価の研究（テストの出題形式）を始めた。令和2年度には観点を取り入れた定期テストを1集団ではあるが1回だけ実施することができた。今後は、さらにこの取組が継続していくことが求められる。そのためにも、教科研修会を通じて、観点別学習状況の評価についての理解を深め、教員間で共通理解を図っていく必要がある。

3 到達目標

(1) 令和2年度

観点別学習状況の評価する場面（テスト、授業、提出物の状況等）について整理する。

(2) 令和3年度

観点を取り入れた定期テストを実施し、観点別学習状況の評価を行う。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容	備考
4月16日	■研究協力校訪問① (1) 全数学科教員への説明 (2) 教科主任との打合せ	・全数学科教員15人(中5・高10(講師1含))が参加
8月7日	■研究協力校訪問② (1) 校長懇談(挨拶、趣旨を説明) (2) 教科主任への聞き取り □研究計画書の作成(総合教育センター)	・観点別学習状況の評価についての学校の取組状況について聞き取り ・研究計画書(案)を提示 ・事前アンケートを依頼
10月29日	■研究協力校訪問③ (1) 教科研修会(評価資料の提供)	・数学科教員9人(高9)が参加
12月18日	■研究協力校訪問④ (1) 校長挨拶(研修内容の説明) (2) 教科研修会(次年度研究内容の確認)	・観点別学習状況の評価についての講義と演習を実施 ・数学科教員8人(高6・中2)が参加 ・事後アンケートを依頼
1月	□研究報告書の作成(総合教育センター)	

(2) 令和2年度成果と課題

観点別学習状況の評価する場面について整理することを目的として研究を行った。成果は、定期テストの中で観点を取り入れたテストを1集団ではあるが、2回実施することができたことである。これは浜松西高校に所属する教育課程研究委員の協力によるものであり、大きな一歩と言える。今後、観点を取り入れたテストを全学年に波及させ、令和4年度に備えることが大きな目標である。

課題は、教員の観点別学習状況の評価の共通理解を図ることである。教員10人(講師1人含む)と大人数で、教科会議も成績会議の前に実施する程度であり、対面での協議の時間を作ることは難しい状況である。訪問を通じて、数学科教員で研修する機会が設けられ、共通理解が少しずつ進むものと考えられる。「観点別学習状況の評価から評定を付けることに無理がある」、「主体的に学習に取り組む態度の評価方法が難しい」などといった意見が研修会の中で挙がった。今後、考えていかなければいけないことが少しではあるが整理できると言える。「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(中学校)などを参考に、少しずつではあるが、観点別学習状況の評価の理解が進むことを期待したい。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
5月7日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談(挨拶、趣旨を説明) (2) 教科主任との打合せ	・校長、副校長に趣旨を説明 ・研究計画書(案)を提示
6月25日	■研究協力校訪問②	・数学科教員各自が作成した定期テ

	(1) 教科研修会（観点を取り入れた定期テスト問題についての協議①）	ストの出題の意図などの説明を聞き、質疑応答
7月29日	■校長協会教育課程専門委員会 (1) 観点別学習状況の評価の取組状況の発表	・教務課、研修課、中等部から観点別学習状況の評価についての取組状況の説明
9月3日	■研究協力校訪問③（オンライン） (1) 教科研修会（観点を取り入れた定期テスト問題についての協議②）	・数学科教員各自が作成した定期テストの観点について協議
11月2日	■数学教育研究会参加 (1) 研究授業を参観	・研究授業を参観し、他校の数学科教員を含め、協議
1月18日	■研究協力校訪問④（オンライン） (1) 教科研修会（研究報告等）	・研究報告書の説明、観点別学習状況の評価についての状況を確認 ・事後アンケートを依頼

(4) 令和3年度成果と課題

成果の1点目は、令和4年度に向けて現行3観点（新2観点）を取り入れた定期テストを複数回、試行的に実施することができたことである。中等部があるため、観点別学習状況の評価の理解は比較的進みやすいと考えていたが、実際は想定と異なるものであった。そのような中、研修主任であり、かつて教育課程研究委員であった教員がリードし、数学科教員全員の協力の下、観点別学習状況の評価の理解を進めることができた。また、訪問を通じて観点別学習状況の評価についての講義、演習を行ったことも観点別学習状況の評価の理解の一助になったと考える。来年度は全ての科目において観点を取り入れた定期テストを実施していくことが期待できる。

成果の2点目は、教員同士の共通理解が図れたことである。数学科教員は中等部を含めて15人おり、教科会議を定期的に開くことが困難な中、今回の研修を機に話し合いの場が幾度となく設定された。その教科会議では、各自で作成した定期テストの作成の意図などの説明やそれに対する質疑応答があり、お互いの考えを把握することができたと言える。これは、教科主任がうまく調整して教科会議の機会を作ったからである。今後も、このように教員が共通理解を図れる場の設定が大切である。

また、先進的に取り組む浜松西高校の取組を他校の先生に伝える機会があったことにより、県内の高校も刺激を受け、各校の観点別学習状況の評価の理解が進んだことも事実である。

5 今後の展望

知識偏重のテストから脱却し、資質・能力を育成するために観点を取り入れた定期テストが定着していくものとする。また、テスト以外にも観点を図る機会が設けられていくことが期待できる。

図11 浜松西高等学校（数学科）研究報告

(7) 富岳館高等学校（理科）研究報告

1 研究テーマ

観点別学習状況の評価の円滑な実施

2 現状と課題

(1) 令和2年度

自然科学系列において、5～6人のグループで自ら課題を発見し、その解決の方策を積極的に考えるなど、探究の過程を通じた活動を行っている。

中学校での取り組み事例を参考にしながら、定期テストを観点別に作成することについて検討している。学期初めに定期テストを授業担当の間で共有し、授業計画作成の一助とする。

一部の担当で令和元年度の授業において、教育課程説明会で発表のあった1枚ポートフォリオを用いた授業改善に取り組んだ。授業改善及び評価の材料集めとしての有効性は理解できるものの、授業担当の負担が大きく継続の難しさを感じている。

(2) 令和3年度

新学習指導要領における観点別学習状況の評価の実現に向けて、ワークシートやポートフォリオを工夫してきた。

令和4年度の本格実施に向けて、より精度の高いワークシートやポートフォリオ及び判断の基準を検討し、教科内で共有する。1年生の履修科目である「科学と人間生活」を担当する教員間の情報共有を促進する。

3 到達目標

(1) 令和2年度

1枚ポートフォリオなどの生徒の記述資料から指導と評価の一体的な改善を図っている。継続的に使用できる1枚ポートフォリオの仕立てを構築している。

(2) 令和3年度

観点別に評価材料を集めて学期の評価を算出している。

実験における観点別学習状況の評価を実施している。

生徒が作成した問題について観点別学習状況の評価を実施している。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容	備考
4月17日	■研究協力校訪問① 校長懇談、研究協力教員との打合せ	・観点別学習状況の評価の材料の研究 ・「思考・判断・表現」についてのワークシート作成
6月22日	■研究協力校訪問② 教科研修会（4人参加）	・学習評価の講義 ・他校で作成した1枚ポートフォリオとワークシートの紹介
11月19日	■研究協力校訪問③ 研究授業、研究協議 教科研修会（5人参加）	・生徒同士の相互評価について協議 ・作成したワークシートに関する意見交換
2月22日	■教科研修会	・今まで作成したワークシートに関する意見交換、今年度の研究内容の振り返り

(2) 令和2年度成果と課題

成果としては、各科目で観点別に評価するためのワークシートを作成できたこと、また、実践後に各々が作成したワークシートについて共有することで、評価の材料作成に関するポイントを掴むことができたこと、以上の2点が挙げられる。また Google Classroom を用

いてレポートを回収し、生徒の記述内容から評価するなど、ICTを活用した手法についての研究も行った。具体的には①事前にルーブリックを提示する②1回目の提出後に教師から内容に関するコメントを送付する③再提出されたものについて評価を行う、以上の手順で行った。Google Classroomを使うメリットとして、生徒にとっては評価規準が明確になり主体的に課題に取り組めること、教員にとっては取組状況を随時確認できることが挙げられる。

課題としては、評価を行うタイミング、適正なルーブリックの作成、教員の負担軽減のための工夫、評定への算出方法などが挙げられる。特に評定への算出は学校全体に関わることである。理科での取組が学校全体で共有されることが期待される。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
5月	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談 (2) 理科教員との打合せ (3) 観点別学習状況の評価に関する説明	・研究の方向性を確認 ・高等学校学習評価の参考資料（静岡県総合教育センターR3.3）の紹介
5月～7月	○研究協力校における研究 評価計画作成、評価材料の収集、 観点別学習評価	・科学と人間生活、物理基礎、物理で実施
8月	■研究成果の中間報告・協議 ZOOMにて実施	・研究協力校が実施した研究について、 総合教育センターより助言 ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所 R3.8）の紹介
8月～9月	○研究内容の検討、研究成果の提出 学習評価の参考資料（案）の作成	
9月	■他研究協力校（浜松湖東高校）との 情報共有 ZOOMにて実施	・評価計画、評価材料、判断のポイント 等の紹介、質疑応答
1月	■研究協力校訪問② (1) 教科研修会（振り返り） (2) 校長懇談	・実践後の成果と課題 ・理科教員全員にアンケートの実施

(4) 令和3年度成果と課題

「科学と人間生活」では、観点別に評価材料を集めて学期の評価を算出した。授業担当者4人で共通の評価計画を作成し、評価材料の収集と観点別での評価を実施した。定期的に担当者間の進捗確認や、計画の修正を行っていく必要性が明らかとなった。担当者の裁量で評価する部分と共通で評価する部分を明確にすることで、スムーズな運用につながった。「主体的に学習に取り組む態度」については多様な評価材料を収集することで、より公正な評価となる。

「物理基礎」では、実験における観点別学習状況の評価を実施した。「主体的に学習に取り組む態度」については、プリントへの記述を基に各時間の取組に対する評価を試みた。評価規準を事前に示した上で記述させることが、公正な評価につながると考えられる。また、評価の素早いフィードバックが、生徒の学びの調整に効果的に作用することが示唆された。

「物理」では、生徒が作成した問題に対する観点別での評価を実施した。問題の作成も2時間、問題の修正に1時間、問題を交換しての演習に2時間の配分で実施した。事前に具体的

な評価規準を示すことにより、問題作成に方向性を与えることができ、複数の分野に渡って思考させることができた。特に課題の再提出が、生徒の学びの調整に効果的に作用することが示唆された。

5 今後の展望

研究の成果を基に、年次別研修等で学習評価への理解を深める。

図 12 富岳館高等学校（理科）研究報告

(8) 浜松湖東高等学校（理科）研究報告

1 研究テーマ

(1) 令和 2 年度

観点別学習状況の評価の円滑な実施及び観点別学習状況評価を反映させたテスト問題の作成

(2) 令和 3 年度

観点別学習状況の評価の円滑な実施

2 現状と課題

(1) 令和 2 年度

新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、生徒の主体的な学びを深めていきたいと感じている。

学校独自の授業観察シートを用いて、年に 2 回、公開授業と校内研修を行っている。

学校全体で、R80（2 文を接続詞でつなぎ、80 文字以内で授業を振り返る）により、思考力・表現力・論理力を育成する取組を行っている。

理科では、授業ごとに振り返りシートを書かせているが、現状では、R80 による記述とはなっていない。また、授業ごとの R80 による記述は、授業担当の負担は大きいと感じている。

(2) 令和 3 年度

新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、生徒の主体的な学びを深めていきたいと感じ、校内研修や公開授業を積極的に行っている。

生徒の実態に合った「思考・判断・表現」を測る問いは徐々に作成できるようになっている。

観点別学習状況の評価の総括及び評定への総括について、明確な方向が定まっていない。

3 到達目標

(1) 令和 2 年度

ワークシート、ポートフォリオ等による記述を活用した、観点別学習状況の評価を実施している。観点別学習状況評価を反映させたテスト問題を作成している。

(2) 令和 3 年度

観点ごとの評価方法を整理し、評価計画を立てている。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和 2 年度研究実績

時期	内容	備考
4 月 16 日	■研究協力校訪問① 校長懇談、研究協力教員との打合せ	・観点別学習状況の評価の材料の研究

		・観点別学習状況の評価を反映させたテスト問題の作成 ・アンケート依頼
6月19日	■研究協力校訪問② 教科研修会（研究内容説明、学習評価）	・学習評価の講義 ・観点別学習状況の評価を反映させたテスト問題の作成について協議
11月11日	■研究協力校訪問③ 校長懇談、研究授業、研究協議	・「知識・技能」、「思考・判断・表現」の評価の実施
12月14日	理科教員全員にアンケートの実施	
2月22日	校長懇談、教科研修会（振り返り）	・今年度の成果と課題の確認 ・次年度に向けて研究協力の依頼

(2) 令和2年度成果と課題

学習評価の講義により、理科教員全員で学習評価の考え方について周知徹底した。また、形成的評価をするためのワークシート、ポートフォリオ等を紹介した。令和2年度は研究協力教員1人のみにお願いした。

「知識・技能」、「思考・判断・表現」を評価するための解決したい課題や問いを設定し、対話を必要とする授業実践及び研究協議を行った。解決したい課題や問いの設定には、生徒の理解度の把握が必要であり、診断的評価や形成的評価の重要性を再確認した。観点別学習状況の評価を反映させたテストの作成をしたが、「主体的に学習に取り組む態度」を反映させることに難航しており、次年度への課題である。

令和2年度は、単元ごとのポートフォリオを活用し、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行った。評価基準を細かくしすぎると、基準に入らない解答の評価の判断が難しくなる。誰が評価しても同じ評価になるように大まかな評価基準を作成する必要がある、次年度への課題である。

「知識・技能」として紹介しているが、表現力を必要とする「知識・技能」の評価の具体例を示した。複数の観点を1つの材料で評価する方法も検討する必要がある。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
5月	■研究協力校訪問① 校長懇談、理科教員との打合せ、全職員に向けて学習評価の講義と演習	・研究の方向性を確認 ・理科教員にアンケートの実施 ・「思考・判断・表現」の問題作成の依頼
5月～7月	○研究協力校における研究 「思考・判断・表現」を育成する問いの作成及び評価の実践 「思考・判断・表現」を育成する問いや振り返りシートを用いた「主体的に学習に取り組む態度」の評価の実践	・「思考・判断・表現」を評価する問いは、日常と関連づけた問いを作成し、学習したことを基に理論立てて記述させることを確認
8月	■研究成果の中間報告・協議	・Zoomにて実施 ・研究協力校が作成した問い等について、総合教育センターより助言 ・国研資料の紹介

8月 ～9月	○研究内容の検討、研究成果の提出 学習評価の参考資料（案）の作成	・メールにて実施 ・学習評価の参考資料（案）作成 に関する協議
9月	■研究協力校（富岳館高校）との情報共有	・Zoomにて実施 ・評価計画、評価材料、判断のポイント等の紹介、質疑応答
1月	■研究協力校訪問② 教科研修会（振り返り）、校長懇談	・実践後の成果と課題 ・理科教員全員にアンケートの実施

(4) 令和3年度成果と課題

今年度は物理専門、化学専門の2人に研究協力を依頼した。

「思考・判断・表現」を評価するための適切な問いの作成について、日常と関連付けた問いを作成することで、難しい現象でも生徒は興味を持って取り組むことができた。しかし、日常と関連付かない単元で、どのように問いを作成するか、あるいは、問いだけでなく、「考えるための材料」についても工夫が必要であった。

振り返りシートによる「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、課題に取り組む際の自己調整を具体的に記載させることで評価をした。日常と関連付けたり、新たな疑問を記載したりしているものについてAとした。記述の視点を生徒に事前に与えないと解答の幅が広がり、採点が難しくなる。また、書くための時間の確保が重要である。「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」を評価する場面を設けるには、生徒が主体的に活動する場面が必要であるが、今までと同じように「知識・技能」を教えていると授業時間が増えることになる。「知識・技能」を身に付ける演習等の時間をどこまで設けるかなど、生徒の実態に合わせた指導と評価の計画の検討が必要である。

5 今後の展望

研究の成果を基に、年次別研修等で学習評価への理解を深める。

図13 浜松湖東高等学校（理科）研究報告

(9) 静岡中央高等学校（保健体育科）研究報告

1 研究テーマ

(1) 令和2年度

生徒の実態を踏まえた効果的な指導と学習評価の在り方

(2) 令和3年度

指導と評価の一体化を図った授業実践と学習評価 ～単元計画表の作成、学習プリントの評価～

2 現状と課題

(1) 令和2年度

共生教育の重要性が説かれる中、障害のある生徒等への指導について、どのような配慮を授業で行い評価していくのかということが、各高等学校において喫緊の課題となっている。特に実技科目である「保健体育」は、授業に参加する上で配慮する点が多く、評価方法についても個別の対応が必要とされている。

静岡中央高等学校では、様々な配慮を要する生徒が在籍するため、生徒への個別の指導や評価規準の妥当性に課題を抱えている。指導と評価の一体化を目指した学習評価について理

解を深めるとともに、授業実践を通して生徒への効果的な指導を通して、深い学びにつながる学習評価の工夫について研究する。

(2) 令和3年度

令和4年度から学習指導要領が年次進行で始まるにあたり、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点について、教科内で共通認識の下、授業を進めていくことが求められる。

静岡中央高等学校では、前年の研究の振り返りから、担当ごとに学習内容が異なるため、統一した評価規準がないまま個別に評価している現状が散見され、担当によって評価にずれが生じていること、学習プリントを評価材料として「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の観点を見取るための方法を課題としている。

このことから、教科内で統一性を持たせるため、同一科目で共通認識を図るとともに、指導と評価の一体化を図った効果的な学習プリントの作成や評価について研究する。

3 到達目標

(1) 令和2年度

保健体育における授業の実態を把握するとともに、新学習指導要領に向けた学習評価の理解を深め、効果的な学習評価の在り方について課題を明確にする。

(2) 令和3年度

単元計画表の作成から指導と評価の一体化を理解し、教科内で評価規準の共通理解を図る。「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」の評価を踏まえた学習プリントを作成し、学習評価の精度を高める。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容	備考
4月17日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談（挨拶、趣旨説明） (2) 教科主任との打合せ	
6月23日	■研究協力校訪問② (1) 校長懇談（研究計画の確認） (2) 授業実践参観（体育、保健）	・体育及び保健の授業を参観し、実態把握
9月30日	■研究協力校訪問③ (1) 校長懇談（研修内容説明） (2) 教科研修会（学習評価について） (3) 授業実践資料の提供依頼	・新学習指導要領に向けた学習評価の在り方について講義を実施
11月20日	■研究協力校訪問④ (1) 授業実践参観（体育） (2) 授業実践資料の収集	・障害のある生徒を対象とした体育授業を参観
1月26日	■研究協力校訪問⑤ (1) 校長懇談（実践報告） (2) 教科研修会（単元計画について） (3) 研究授業参観（保健） (4) 研究協議	・養護教諭とチームティーチングの保健授業を参観

(2) 令和2年度成果と課題

保健体育の授業における「障害のある生徒等への指導」について、授業参観を通して様々

な配慮がされていることが分かった。しかし、通常の体育も含め、担当教諭が毎時間手探りで授業を展開していることが課題である。

教科研修会を通して、授業担当者の裁量が大きく、学習内容の統一性に欠けていることが課題であることが認識できた。教科で育成したい資質・能力の共通理解を図り、生徒にとって充実した体育授業や運動実践につなげられる評価材料の工夫により、学習評価の精度を高め、指導と評価の一体化を図ることが求められる。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
4月27日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談（研究概要の説明） (2) 保健体育科協議（研究実践打合せ）	・前年の成果や課題を振り返り、本年度の研究の方向性について協議
6月9日	■研究協力校訪問② (1) 校長懇談（研究計画の確認） (2) 事前協議（研究内容の確認）	・単元計画表の作成と学習プリントの作成と評価について実践の確認
6月～11月	○授業実践 (1) 単元計画表の作成 (2) 学習プリントの修正及び活用 ○学習プリントの収集 (1) 指導と評価の計画 (2) 学習プリントの評価 (3) 学習評価の参考資料の作成	・同一科目、単元において、担当ごとに単元計画表を作成 ・球技選択において学習プリントの統一を図ることを確認 ・学習プリントの評価機会の考察 ・学習プリントを2観点で評価（年次別研修、教科研究会等で評価） ・評価資料を基に参考資料を作成
12月23日	■研究協力校訪問③ (1) 保健体育科協議（研究実践報告） (2) 〃 （成果と課題） (3) 〃 （次年度の取組）	・学習評価の参考資料の作成報告 ・研究の振り返りと次年度以降の科の方向性を協議
1月26日	■研究協力校挨拶 (1) 校長懇談（実践報告）	※オンラインにて実施

(4) 令和3年度成果と課題

授業担当個々に単元計画表を作成することで、単元の目標やその評価規準、評価計画について理解を深めることができた。また、同一科目の単元計画表を作成することにより、教員間で評価規準にずれが生じていることが分かり、教科内で評価規準の統一につなげることができた。体育では、学習指導要領に即した評価規準が、学校によって生徒の実態にそぐわないことがあるため、生徒の実態に合わせた評価規準を作成し、保健体育科内で共有を図る必要がある。

学習プリントでは、記述内容を工夫することで、思考・判断の変容や深い学びが読み取れる記載へと変化し、記録に残す評価材料となった。また、同一科目で統一した学習プリントを活用することで、評価の観点が明確になり、業務改善にもつながった。今後は、言語化が苦手な生徒の評価について、観察により活動の実態を把握することで、学習評価の精度を高め、指導と評価の一体化を図ることが求められる。

5 今後の展望

科目ごとに年間指導計画で実施する単元で単元計画表を作成することにより、評価計画を明確にし、生徒の実態に合わせた評価規準を作成し教員間で共有することで、統一性のある評価

を目指す。言語化が苦手な生徒や様々な配慮を要する生徒への学習評価の在り方について、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を育成する学習内容や学習プリントの工夫について、授業実践を通してさらに改善を図っていく。

年次別研修等で、単元計画表の作成について学び、指導と評価の一体化を理解、実践する。

図 14 静岡中央高等学校（保健体育科）研究報告

(10) 清水南高等学校（芸術科）研究報告

1 研究テーマ

新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業の開発と観点別学習状況の評価の充実

2 現状と課題

題材の開始時と学習活動のまとまりごとに、4 観点に基づく到達目標を生徒に提示し、生徒と評価基準の共有に努めている。中等部は、観点別学習状況の評価から評定を算出する方法を用いている。芸術は、定期テストなどのペーパーテストによって点数を明確に示すことが難しいため、生徒、保護者、他教科の教員から、芸術科教員の主観による評価という疑念を払拭する必要がある。高校芸術科における教科の特性を生かした評価、評価の方法や基準の信頼性の確保が課題である。

3 到達目標

新学習指導要領の趣旨に沿った「音楽Ⅰ」と「美術Ⅰ」の授業例を開発する。

「音楽Ⅰ」と「美術Ⅰ」の年間指導計画と評価計画に基づいた観点別評価の実践例を開発する。

「音楽Ⅰ」と「美術Ⅰ」における、学習評価の妥当性と信頼性を確保するための取組み例を開発する。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和 2 年度研究実績

時期	内 容	備考
6 月 2 日	■研究協力校訪問①	・研究の趣旨説明、研究協力依頼 ・芸術科全教員への事前アンケートの実施 依頼、聴き取り調査（共通教科「芸術」での学習評価の現状と課題）（「音楽Ⅰ」と「美術Ⅰ」の学習評価の現状と課題 ・研究内容と日程の調整
9 月 3 日	■研究協力校訪問②	・授業と評価計画、評価検討会の事前検討
10 月 22 日	■研究協力校訪問③	・授業実践及び授業の振り返り ・評価検討会の開催
1 月 21 日	■研究協力校訪問④	・事後アンケートの提出 ・研究の振り返り及び研究報告

(2) 令和 2 年度成果と課題

教科の専門性を生かした授業研究の質の向上を図るために、新学習指導要領、観点別学習状況の評価について、説明した。学習指導要領解説を読み、理解をした後に、質問に答える

形で説明を加えた。このことにより、新学習指導要領について理解を深めることができた。また、新学習指導要領の趣旨に沿った授業構想づくりを行ったため、より新学習指導要領の理解を深めることができた。

美術科では、公開授業、事後検討会を持つことにより、教科内で学習評価の考え方を理解し、形成的評価の充実を図ることができた。この取組により、美術教員が観点別状況の評価のどこにつまずきを感じるのかの傾向を知ることができた。本年度の取組により、教科の専門性を生かした授業研究の質の向上、新学習指導要領の趣旨に沿った授業づくりの普及は進んだと言える。

課題としては、教科内での協働が難しく、音楽科における学習評価の理解、形成的評価の充実を図るまでには至らなかった。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内 容	備考
5月11日	■研究協力校訪問①	・研究の趣旨説明、研究協力依頼 ・芸術科全教員への事前アンケートの実施依頼、聴き取り調査（共通教科「芸術」での学習評価の現状と課題） ・聴き取り調査（「音楽Ⅰ」と「美術Ⅰ」の学習評価の現状と課題）
6月30日	■研究協力校訪問②	・研究内容と日程の調整、授業・評価計画、評価検討会の事前検討
12月9日	■研究協力校訪問③	・授業実践、授業の振り返り、評価検討会の開催
1月19日	■研究協力校訪問④（オンライン）	・事後アンケートの提出 ・研究の振り返り及び研究報告

(4) 令和3年度成果と課題

昨年度の研究成果と課題を振り返り、今年度の研究内容を確認した。観点別学習状況の評価について「高等学校 学習評価の参考資料―目標に準拠した観点別学習状況の評価の進め方（例）―」の実践例に触れながら説明をした。それを踏まえた授業づくりを行ったため、生徒の学習の自己調整や教師の授業改善につながる学習評価への理解を深めることができた。

音楽科、美術科ともに、公開授業、事後検討会を持つことにより、「解決したい課題や問い」を柱とした授業デザインの向上を図ることができた。その取組の中で、観点別学習状況の評価の際に、つまずきを感じる点を知ることができた。また、学習評価の各観点のバランスを意識した年間指導計画の見直しを行い、教科内カリキュラム・マネジメントを進めることができた。

高校芸術科における教科・科目の特性を生かした評価について理解が進んだが、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、まだまだ迷いが生じる部分が大きく、各科目の様々な分野の実践の中で研究を進めていく必要がある。

5 今後の展望

表現の最終形態が作品や演奏となる教科芸術における、客観性を持った評価規準や評価基準の設定の研究は、これからも深化させる必要がある。その中で、学習評価が生徒の学習の自己調整や教師の授業改善につながることも強く意識したい。

新学習指導要領に対応した実践は始まったばかりで、芸術担当教諭の内容理解の促進はもちろん、講師への周知が大きな課題といえる。本研究で明確化した課題の解決にあたっては、各校での教科としての取組が欠かせない。一方で芸術教員が複数配置の学校は限られているため、教科研究会と協力し、研究を深めることも考えられる。

図 15 清水南高等学校（芸術科）研究報告

(11) 浜松南高等学校（外国語科）研究報告

1 研究テーマ

自己調整に基づく英語発信力の育成

2 現状と課題

(1) 令和2年度

定期テストにおいて、これまで観点別学習状況の評価を取り入れてきたが、全ての学年での取組には至っていない。3観点となったが、観点と観点の境目が難しい中、どのようにそれぞれの観点をテスト作成に落とし込んでいけばよいのか検討する必要がある。

入試の動向が不明瞭な状況で、新学習指導要領をどのように授業にて実行し評価するのか、評価タスクの在り方について研究する必要がある。

生徒にアウトプットさせる機会を増やすなど、英語を活用する機会を多く設定してきたが、これらが生徒の主体的な学び（学習を自己調整すること）につながるよう工夫する必要がある。

英語の副教材としてタスクベースの教材を取り入れ、その指導方法について教員間で協議してきた。より効果的な指導方法について研究を進める必要がある。

パフォーマンス評価を実施しているが、生徒が自らの学習を調整できるようなフィードバックの在り方について共通認識を持つ必要がある。

(2) 令和3年度

1年目の研究により、自己調整に基づく英語発信力育成のための指導プロセス(単元・授業におけるPlan, Do, Seeにおける自己調整及び粘り強さ)を明らかにすることができたが、CAN-DOリストの形式による授業を通して育成したい資質・能力の明確化に課題がある。

新学習指導要領の科目の目標及び内容に基づき、四技能五領域のそれぞれの領域における「知識・技能」と「思考・判断・表現」の観点の別を具体的な文言として整理することができていない。

パフォーマンステストによる産出技能の評価について、「書くこと」の観点別学習状況の評価の具体的方法について、これまでルーブリック等を作成し取り組んできたが、その妥当性や実行可能性において課題がある。

評価結果を生徒の学習改善や教師の指導改善につなげるための工夫や体制づくりが十分にできていない。

3 到達目標

(1) 令和2年度

自己調整の在り方について理解を深め、共通認識を持つことができています。

自己調整に基づき、英語の「知識及び技能」を育成することができています。

自己調整に基づき、英語の「思考力・判断力・表現力等」を育成することができています。

(2) 令和3年度

自己調整に基づく英語発信力育成のための指導プロセスと評価についての実践している。

目的・場面・状況を大切にしたタスクを作成している。
評価結果を生徒の学習改善や教師の指導改善につなげるための体制を構築している。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容	備考
8月19日	■研究協力校訪問① (1)研究の目的及び方法についての説明 (2)現状と課題の共有 (3)課題解決に向けての共通テーマの設定	・研究協力校参加者6人 (1, 2年生担当教諭)
9月	教員・生徒アンケートの実施	
10月5日	■研究協力校訪問② (1)授業参観(1年生2クラス) (2)共通テーマを踏まえた授業の振り返り	・授業担当(小粥教諭、古川教諭) ・研究協力校参加者6人
11月30日	■研究協力校訪問③ 敬愛大学 英語教育開発センター長 国際学部 国際学科 教授 向後秀明 氏による指導・助言	・参加者10人 ・講師招請は研究協力校による。
2月8日	■研究協力校訪問④ 1年間の研究の成果と次年度に向けての計画	

(2) 令和2年度成果と課題

目標に準拠した、指導と評価の一体的改善について、「外国語を使って何ができるようになるか」という観点から研究協議を行い、「指導することを評価する」「評価することを指導する」という2つのベクトルから研究を進めた。

「自己調整」を図ることができるようにするための指導について、「自己調整」(自己の学習を調整しようとする側面)をどのように把握するか、把握した結果を「主体的に学習に取り組む態度」の評価を総括する際にどのように勘案するか、「自己調整」をできるようにするためにどのような指導が必要かについて実践事例を踏まえて協議した。

外国語科における3観点の整理について、外国語科の内容のまとめ(四技能五領域)における評価対象はどのように整理するべきかについて共通理解を図ることが課題である。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
5月26日	■研究協力校訪問① (1)研究1年目の取組内容の確認 (2)現状と課題の共有 (3)研究2年目の取組内容についての協議	・研究協力校参加者6人 (1, 2年生担当教諭)
6月	教員・生徒アンケートの実施	
6月23日	■研究協力校訪問② (1)指導と評価の取組の共有 (2)観点別学習状況の評価(ABC)とその総括	・研究協力校参加者5人 (1, 2年生担当教諭)
10月	中間報告(Google ドライブへの成果物提出)	
1月12日	■研究協力校訪問③	・研究協力校参加者6人

	(1)研究総括 (2)今後の課題の共有	(1, 2年生担当教諭)
1月	教員・生徒アンケートの実施	

(4) 令和3年度成果と課題

単元における目標（英語を使って「何ができるようになるのか」）を明示するとともに、学習過程において評価項目（「何ができるようになったか」）の具体を生徒が認識しながら学習に取り組むことができるような指導を行った。これにより、生徒は評価されることが単元末等までにできるようになることを目指して、自己調整しながら粘り強く学習に取り組むことができた。

また、四技能五領域の「書くこと」について、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の観点を整理した上で、授業で取り組むタスクやパフォーマンステストを、目的・場面・状況が具体的に示されたタスク設定の中で、生徒が、これに応じて今まで学習した全ての知識や表現を活用し、ことばを使って行動する力を発揮できるかというイメージで作成することができた。

CAN-DOの内容が言語行為(performance)としてどの程度成功しているかタスク達成度(Task achievement)をビジュアル化して生徒に示す評価方法を開発することができた。また、これにより、教師の採点負担が軽減されるとともに、教師の指導改善のための協議題とすることができた。

質問紙調査の分析により、生徒の学習評価の工夫が授業改善につながっていると感じるようになっていくことが明らかになった（6月平均4.0→1月4.8）。このことから、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善と評価の重要性は共有されたものと考ええる。一方で、生徒間の対話を促したり、複数の視点や立場から考え、比較、統合することで解決策や答えにつなげたりするような「考えるための材料」を準備することに教員は負担を感じている（6月平均5.3→1月4.6）。

5 今後の展望

研究の過程で、目標に準拠した指導と評価の一体的な改善の必要性を強く感じることはできたが、同時に、そのための授業準備や評価時間を生み出すことができない困難さを感じている。この困難さを軽減するためにもCAN-DOリストの存在は重要であり、CAN-DOリストに基づく指導と評価を一層推進する。

図 16 浜松南高等学校（外国語科）研究報告

(12) 静岡高等学校（家庭科）研究報告

1 研究テーマ
(1) 令和2年度 新学習指導要領の趣旨に沿った指導計画の作成と授業実践
(2) 令和3年度 教科で育成したい資質・能力の明確化を図った指導計画と授業実践

2 現状と課題

(1) 令和2年度

新学習指導要領への理解と準備ができており、授業改善や学習評価の充実に向けた実践を意欲的に行っている。そのため、現在行っている科目「家庭基礎」の授業について、新学習指導要領の趣旨に照らし合わせて再整理していく。特に「生活の営みに係る見方・考え方」に示される視点（「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築等」）が、取り上げる内容や題材構成等によって適切に定められているのか等を検討し、授業改善の方向性を確認しつつ、年間指導計画の見直しと授業実践を行うことにした。

(2) 令和3年度

新学習指導要領で3つに再整理された資質・能力をバランスよく育成するために、科目「家庭基礎」の内容について、相互に有機的な関連を図った授業を展開することを目標に、年間指導計画を作成している。本年度は、知識・技能の習得のみではなく、意思決定や問題解決をも含めた資質・能力の育成を目指している教科の特質を踏まえ、自立した生活者として、よりよい生活の実現に向けて、身近な生活の課題を主体的に捉え、具体的な実践を通して、課題解決を目指すという一連の学習過程を踏まえた授業を構想し、授業実践に結び付けていく。

3 到達目標

(1) 令和2年度

新学習指導要領の趣旨に沿った指導計画の作成と授業実践をしている。

(2) 令和3年度

教科で育成したい資質・能力を明確にし、単元の指導計画を作成して授業実践をしている。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容	備考
4月	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談 (2) 教科主任との打合せ	・研究の趣旨、意向確認、実態把握
6月	■研究協力校訪問② (1) 教科研修会	・アンケートを実施 ・研究計画書に基づく研究内容、研究の進め方について確認
9月	■研究協力校訪問③ (1) 研究授業（定期訪問） 単元「子どもと生きる」	・授業の振り返りはオンラインで実施
11月	■研究協力校訪問④ (1) 研究授業 単元「食生活をつくる」 本時「私たちはどのように食べているのか」 (2) 研究協議	・授業及び評価について検討
1月	■研究協力校訪問⑤	・次年度の展望、年間指導計

	(1) 教科研修会 (2) 校長懇談（挨拶・研究報告）	画の検討 ・事後アンケートを実施
(2) 令和2年度成果と課題		
2学期始めに実施する単元について、「生活に係る見方・考え方」に示されるいずれの視点を重視するのかを検討し、単元を貫く問いや教材を考えたり、「主体的・対話的で深い学び」の視点から現在の授業を見つめ直したりし、単元の目標を達成できるように授業を構想した。「生活の営みに係る見方・考え方」に示される視点を意識したため、単元を通して学習内容においてその視点から物事を捉え、考察することができ、一貫性のある授業を展開することができた。 新学習指導要領で3つに再整理された資質・能力をバランスよく育成するために、科目「家庭基礎」の内容AからDまでについて、相互に有機的な関連を図った授業を構想・展開することを目標に、年間指導計画の検討及び作成を行った。 課題としては評価についてである。授業前に評価基準や評価方法をあらかじめ設定しておいたことで、授業後の評価活動へスムーズに進めることができた。しかし、ワークシートの記述から「思考・判断・表現」を評価する問いを考えたと、問いかけ方が適当ではなかったのか、生徒の記述について評価したいものがうまく表出されないという課題が浮き彫りとなった。問いの設定については授業後に検討をしたが、実践を積み重ねながら改善をし、評価力の向上を図っていくことが求められる。		
(3) 令和3年度研究実績		
時期	内容	備考
4月	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談 (2) 教科主任との打合せ	・本年度の研究内容及び研究の方向性について確認
5月	■研究協力校訪問② (1) 教科研修会	・6月から行う授業の単元計画、ワークシートの検討及び学習指導案の作成
6月～10月	■授業実践 単元「共に生き共に支える」 ■授業実践後の振り返り (1) 授業内容について (2) 生徒の成果物の評価について	・6月から9月上旬にかけて研究協力校での授業実践 ・授業実践後、振り返りはオンラインにて実施
11月	■研究協力校訪問③ (1) 教科研修会	・住生活分野における授業実践について協議・検討
12月	■研究のまとめ (1) 教科研修会	・単元「共に生き共に支える」の授業について実践のまとめ ・事後アンケートを実施
1月	■研究協力校への報告	
(4) 令和3年度成果と課題		
家庭科では思考力、判断力、表現力等の目標に、「生活の中から問題を見だし、課題を設定し、解決方法を検討し、計画・実践、評価・改善する」という一連の学習過程が示されている。その学習過程を踏まえて課題を解決する力の育成が図れるような授業を、単元「共に生き共に支える」で構想し実践した。授業構想にあたって特に留意したことは、空間軸と		

時間軸という2つの視点で学習対象を明確にしたことである。また工夫したことは、生徒が実生活に生かし将来にわたって学び続けられるように、「共生社会と福祉」と「被服製作」の2つの内容を横断的に組み合わせたことである。

単元終了時の生徒のワークシートには、自分や社会の課題の解決に向けて考え、実践しようとする記述が多く、大部分の生徒が目標に対しておおむね満足できる状況であった。これは、単元の目標を明確にし、生徒の実態に合わせて、生徒がどのように学ぶのかの視点から授業構想した成果だと考えられる。

以上のような授業実践には各教員が授業力向上のために研究に取り組むことに加え、授業を共に検討し協議できる教員の存在が欠かせない。家庭科の教員は、各校1人の配置の学校も少なくなく、そのような中で他校の教員との情報共有や授業検討を気軽に行える環境づくりが求められる。

5 今後の展望

研究の成果を基に、年次別研修等での新学習指導要領の趣旨に沿った指導計画づくりへの理解が深まるようにする。

図 17 静岡高等学校（家庭科）研究報告

(13) 磐田農業高等学校（農業科）研究報告

1 研究テーマ

カリキュラム・マネジメントへの理解を深め、グランドデザインを意識した授業設計を進めることによって組織全体の授業力向上を図ること、学習評価を更に充実させることを研究テーマとする。

2 現状と課題

(1) 令和2年度

農業教育の学びの中心はプロジェクト型学習である。しかし、それ以外の部分では新学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が十分に進んでいるとは言えず、根拠に基づいた授業改善と学習評価の充実が喫緊の課題となっている。これらの課題に対し、磐田農業高校では学習科学の知見に基づいた校内研修を推進している。令和元年度はALPT研究協力校として授業設計診断4項目の浸透、授業改善のための学習評価を充実させることを目的に、総合教育センター指導主事による講義・演習（授業設計診断4項目）、公開授業週間での授業参観、定期訪問時の公開授業と校内研修会（授業改善のための学習評価）を実施した。5月、12月には全教員を対象とした質問紙調査を行い、分析結果から学校全体で授業改善への気運が高まったことを推察することができた。

令和2年度はこれまでの取組を継続するとともに、前年度の実践を基盤に、カリキュラム・マネジメントへの理解を深め、グランドデザインを意識した授業設計を進めることによって組織全体の授業力向上を図ること、学習評価を更に充実させることを目的として研究を進めていく。

(2) 令和3年度

令和2年度には学校で育成を目指す資質・能力を明確化し、資質・能力の育成を意識した授業設計と学習評価に関する研修を行った。平成元年度から年2回、全教員を対象とした質問紙調査を行い、分析結果から学校全体で授業改善への気運が高まったことを推察することができている。

令和3年度は資質・能力の育成を目指した授業設計を進めることによって教科全体の授業

力向上を図ること、また、授業検討会を実施し、学習評価を更に充実させることを目的として研究を進めていく。

3 到達目標

(1) 令和2年度

授業設計診断4項目を理解し、授業改善に取り組んでいる。

教科で育成を目指す資質・能力を明確にし、それに基づく年間指導計画を作成している。

(2) 令和3年度

授業設計診断4項目を理解し、授業改善に取り組んでいる。

教科で育成を目指す資質・能力を明確にし、4項目に基づいた授業設計や学習評価について理解を深めている。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

年間4回の校内研修会を実施した。第1回研修会ではグランドデザインを基に、学校で育成すべき資質・能力について、第2回研修会では資質・能力を育成する授業の場面について考える研修を実施した。第3回研修会では学習評価（形成的評価）の充実、第4回研修会では形成的評価と総括的評価について研修を行った。第1回研修会の前と第4回研修会終了後に質問紙調査を行い、教員の意識の変容を分析した。

時期	内容	備考
4月	■研究協力への挨拶	・校長懇談（研究の趣旨説明・意向確認） ・研修主任、農場長との打合せ（研究の趣旨説明・教科の実態把握・意向確認）
5月	□研究計画書作成	
6月	■第1回質問紙調査 ■第1回研修会 ・「カリキュラム・マネジメントⅠ」	・学校で育成すべき資質・能力について、グランドデザインに示された資質・能力を育成している場면을マンダラチャートによって整理
9月	■第2回研修会 ・「カリキュラム・マネジメントⅡ」	・授業における資質・能力の育成について授業の中で資質・能力を育成している場면을構想
11月	■第3回研修会 ・「授業改善のための学習評価Ⅰ」	・観点別学習状況の評価、評価規準について、第2回研修で想定した場面での「問い」「学習の成果」を想定
1月	■第4回研修会 ・「授業改善のための学習評価Ⅱ」 ■第2回質問紙調査	・単元計画を作成する中で、形成的評価、総括的評価への理解を促進
2月	■研究のまとめ	・質問紙調査の分析

(2) 令和2年度成果と課題

カリキュラム・マネジメントと学習評価の研修を中心に研究を進めた。研修前の5月と研修後の1月に実施した質問紙調査の回答を分析したところ、カリキュラム・マネジメントに関係する項目と授業設計診断4項目に関係する項目の回答に上昇が見られた。また、年間指導計画の作成では形成的評価の充実や記録に残す場面から総括的評価につなげていく過程への理解を深めることができた。これらは継続的な研修の成果と考えられるが、今後はカリキュラム・マネジメントや学習評価、授業設計診断4項目への意識の向上によって、授業が

どのように変容したのか検証していく必要がある。他方、新学習指導要領に示された農業科目におけるプロジェクト型学習の実施についての理解を深めていく必要もあり、年間指導計画や学習指導案の中にプロジェクト型学習を明確に落とし込むことで浸透を図る予定である。

(3) 令和3年度研究実績

年間4回の校内研修会を実施した。第1回は「組織全体で行う授業研究」、第2回は「事前研修」、第3回は「研究授業・授業検討会」、そして第4回は「学習評価」についての研修を行った。また、授業公開週間で「解決したい課題や問い」を設定し、授業設計診断の4項目への理解を深めると共に、授業設計診断の4項目を取り入れた農業科学学習指導案を作成した。6月と11月に質問紙調査を行い、農業科教員の意識の変容を分析した。

時期	内容	備考
4月	■研究協力への挨拶	・校長懇談（研究の趣旨説明・意向確認） ・研修主任、農場長との打合せ（研究の趣旨説明・教科の実態把握・意向確認）
5月	□研究計画書作成	
6月	■公開授業週間「解決したい課題や問い」の設定 ■質問紙調査	・公開授業週間で、各教員が「解決したい課題や問い」を設定して実施
8月	■校内研修「授業検討会に向けて」	・「組織全体で行う授業研究」について指導主事による講義・演習
9月	■事前研修 ■研究授業、授業検討会	・指導主事による講義・演習
10月	■農業科学学習指導案の作成	・共通基礎科目「農業と環境」で作成
11月	■校内研修「授業改善のための学習評価」 ■質問紙調査、教室文化の診断	・観点別学習状況の評価、評価規準について、形成的評価から記録に残す場面を精選し、総括的评价につなげていく過程を確認 ・指導主事による講義・演習
12月	□質問紙調査、教室文化アンケートの集計と分析 □研究のまとめ	・単元計画を作成する中で、形成的評価、総括的评价への理解を深めた。
2月	■研究協力校への報告	

(4) 令和3年度成果と課題

授業検討会の研修を中心に研究を進めた。研修前の6月と研修後の11月に実施した質問紙調査の回答を分析したところ、研修で扱った内容に関係する項目（カリキュラム・マネジメント「各教科等で児童生徒に育成すべき資質・能力を踏まえて、単元の目標を設定し、単元を構想している。」と学習評価「授業実施前の設計段階において、課題（問い）に対する児童生徒の反応、対話や、答えについて想定している。」）の回答に有意傾向が見られ、校内研修が教員の意識変容を促すことを確認できた。また、農業科学学習指導案の作成では授業設計診断の4項目に基づいた授業設計や学習評価への理解を深めることができた。

5 今後の展望

今後はカリキュラム・マネジメントや学習評価、授業設計診断の4項目への意識の向上によって、授業がどのように変容し、生徒が資質・能力を身に付けたのかを検証していく必要がある。同時に、新学習指導要領に示された農業科目におけるプロジェクト学習や育成を目指す資

質・能力についての理解を深めていく必要もあり、今後も継続的な校内研修が必要だと考える。

図 18 磐田農業高等学校（農業科）研究報告

（14）浜松城北工業高等学校（工業）研究報告

1 研究テーマ

工業科における観点別学習評価による授業改善～学習評価の理解と実践～

2 現状と課題

座学系科目では、知識注入・伝達型授業が多く、実習系科目においては、技術・技能の教授になることが多く、単なる作業となる場合もある。また、授業改善と学習評価を関連させた取組をしている教員が多いとは必ずしも言えず、学習評価を考慮した授業改善が必要である。

3 到達目標

観点別学習評価について理解している。

目標と指導、評価の一体化を意識した授業を構想している。

観点別学習状況の評価による授業改善を実践している。

4 研究実績及び成果と課題

（1）令和2年度研究実績

時期	内容	備考
4月17日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談（趣旨説明・意向確認） (2) 教科主任、研修主任との打合せ	・初年度は、座学系科目の観点別学習評価による授業改善を検討し、2年目では、実習系科目の観点別学習評価による授業改善を検討
7月29日	■研究協力校訪問② (1) 教科主任、研修主任との事前の打合せ (2) 教科研修会（研究計画書の説明及び協議）	・研究計画書（案）を基に、目標と指導、評価の一体化、学習評価の考え方について説明 ・事前アンケートの実施
8月	○研究協力校における研究① 評価（知識・技術）の研究	・「知識・技術」の評価規準の作成
11月4日	■研究協力校訪問③ (1) 研究授業 電子科「電子計測制御」 電子機械科「電気基礎」 (2) 教科研修会（研究授業の振り返りと助言、評価規準と評価場面の妥当性について） (3) 校内研修会（学習評価）	・研究授業は、「思考・判断・表現」の評価規準を作成し実施 ・校内研修は、新学習指導要領の理解に焦点化

11月～12月	○研究協力校における研究② 授業及び評価（思考・判断・表現）の 実践	・「思考・判断・表現」の評価規 準の作成
2月3日	■研究協力校訪問③ (1) 教科研修会（研究の振り返り、次 年度の展望） (2) 校長懇談（研究報告）	・本年度の成果を基に、次年度 研究の見通しの共有 ・事後アンケートの実施

(2) 令和2年度成果と課題

座学系科目の観点別学習状況の評価による授業改善を目的として研究を行った。教科研修会にて研究計画書（案）を基に、「目標に準拠した評価」「指導と評価の一体化」「学習評価の考え方」について共通認識を図り、研究協力校における研究として夏季休業中に「知識・技術」の評価規準を作成し「学習の成果」を想定し、観点別学習状況の評価の必要性の理解を図った。

電子科「電子計測制御」、電子機械科「電気基礎」において「思考・判断・表現」の評価規準を作成し、研究授業を実施し、教科研修会では評価規準と評価場面の妥当性について議論した。校内研修では、新学習指導要領に焦点を当てた研修内容とし、学習指導要領を基に評価規準を作成し、「解決したい課題や問い」「学習の成果」を想定する演習を実施し、工業科だけではなく、学校全体の取組の一步となった。

研究協力校における研究として11月～12月に「思考・判断・表現」の評価規準を作成し、授業を実施し、評価し、学習評価を意識した授業づくりとなった。

作成した評価規準と生徒の記述による実際の評価から、評価規準と評価場面の妥当性について更なる検討が必要である。また、観点別学習状況の評価の考え方について理解を図るため、「知識・技術」「思考・判断・表現」の評価のみとなった。今後、「主体的に学習に取り組む態度」の評価についての検証が必要である。目標からずれてしまった評価も見受けられた。「目標に準拠した評価」について、改めて意識する必要がある。

(3) 令和3年度研究実績

時期	内容	備考
4月27日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談（趣旨説明・意向確認） (2) 教科主任、研修主任との打合せ	
5月18日	■研究協力校訪問② (1) 学習評価の説明（全職員対象） (2) 教科研修会（研究計画書の説明）	・「学習評価の参考資料」（令和3年3月版）の説明 ・事前アンケートの実施
6月～8月	○研究協力校における研究①	・「学びのデザインシート」の作成 ・「主体的・対話的で深い学び」の授業構想 ・「主体的に学習に取り組む態度」の評価場面の検討
10月～11月	○研究協力校における研究②	・「評価規準」「評価の計画」「評価シート」の作成 ・実習系科目における評価の検討

11月18日	■研究協力校訪問③ (1) 研究授業、授業実践 電子科「工業技術基礎」 (2) 教科研修会（評価場面の妥当性）	・研究授業、授業実践は、「評価場面」を意識し「評価シート」を作成し実施 ・研究授業を校内研修と位置付けることを確認
11月～12月	○研究協力校における研究③	・「評価規準」「評価の計画」「評価シート」の作成 ・実習系科目における評価の再検討
1月20日	■研究協力校訪問④（オンライン） (1) 学習評価の説明 (2) 教科研修会（研究の振り返り）	・「学習評価の参考資料」（令和3年11月版）の説明 ・事後アンケートの実施

(4) 令和3年度成果と課題

座学系科目の「主体的に学習に取り組む態度」の評価、実習系科目の観点別学習状況の評価による授業改善を目的として研究を行った。教科研修会にて「目標に準拠した評価」「指導と評価の一体化」「学習評価の考え方」について確認し、研究協力校における研究として6月～8月に「主体的・対話的で深い学び」の授業構想、「主体的に学習に取り組む態度」の評価場面の検討を行い、同一課題において「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行った。10月～11月に実習系科目の「評価規準」「評価の計画」「評価シート」を作成し、観点別学習状況の評価の検討を行った。「工業技術基礎」において「評価場面」を意識した「評価シート」を作成し、研究授業を実施した。教科研修会では、評価場面の妥当性について議論した。11月～12月に再検討後、授業実践を行い授業改善、学習評価を意識した授業づくりとなった。

評価規準の作成と生徒の記述の想定と実際の評価から、評価規準と評価場面の妥当性について継続した検討が必要である。実習科目における評価では、各科目の目標を再確認し、「目標に準拠した評価」について改めて意識すると共に、評価の場面の設定や評価方法について検討していくことが必要である。

5 今後の展望

2年間の研究成果を基に、観点別学習状況の評価による授業改善が進み、「主体的・対話的で深い学び」の実現が図られることが期待できる。

図 19 浜松城北工業高等学校（工業科）研究報告

(15) 浜松商業高等学校（商業）研究報告

1 研究テーマ

観点別学習評価の円滑な実施につながる「主体的・対話的で深い学び」が実現された授業実践事例を収集し、共有化する。

2 現状と課題

令和4年度の学習指導要領改訂に伴う体制整備に向け指導法や学習評価の勉強会を実施しているが、全体の周知と理解まで至っていない。各教員が観点別学習状況の評価について理解を深めるだけでなく、教材の効果的な利用方法等、授業実践事例を収集、共有化し、新学習指導要領への対応を推進する。

3 到達目標

(1) 令和2年度

目標と指導、評価の一体化を意識した授業実践から観点別学習状況の評価の実践例を開発し、収集する。

目標と指導、評価の一体化を意識した観点別学習状況の評価を反映させたテスト問題を作成し、課題と成果をまとめる。

(2) 令和3年度

指導と評価の一体化を意識した観点別学習状況の評価を反映したテスト問題を作成し、収集する。

観点別学習状況の評価の円滑な実施に向け、学習評価を総括的評価につなげる。特に、今までの評定の付け方と観点別学習状況の評価による評定の付け方を比較し、違いを理解する。

4 研究実績及び成果と課題

(1) 令和2年度研究実績

時期	内容	備考
6月 7月	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談 (2) 教務主任、教科主任との打合せ	・趣旨説明・教科の実態把握・意向確認 ・事前アンケートの実施
8月～ 10月	○研究協力校における研究 (1) 観点別評価の実践（課題やルーブリックの作成）をする。 (2) 校内研修会において「浜商で育成したい生徒像」について意見交換する。 (3) 観点別評価を反映させたテスト問題を作成し、検討する。	・科目「マーケティング」を中心として各教員が授業実践 ・観点は「思考・判断・表現」とすることを確認 ・11月実施の研究授業の学習指導案やワークシート等は、教育課程研究委員会でも検討
11月 12日	■研究協力校訪問② (1) 研究授業・授業検討会 (2) 教科主任との打合せ	・授業検討会を通して、観点別学習状況の評価を反映させたテスト問題を作成する手順のまとめ ・生徒の回答を基に、評価規準に照らし評価 ・判断に迷う評価に関しては相談し検討

1月8日	■研究協力校訪問③ (1) 教科研修会 (2) 校長懇談（成果報告）	・今年度研究内容を振り返り、事後アンケートを実施 ・次年度研究の検討
(2) 令和2年度成果と課題 商業科（主にマーケティング担当）として共通のワークシート、評価課題を開発、利用したことで、一回一回の授業で目指す資質・能力が明確となり、学習評価の妥当性や信頼性が向上した。また、事前に評価方針やルブリックについて生徒と共有したことから、生徒自身が何を目標とした授業であるかを把握し、最終的に評価課題によって自身の到達度を振り返ることができた。 また、観点別学習状況の評価を反映した問題を定期テストで実施することで、評価の機会を精選し、教員の負担削減が図れた。判断に迷う評価についての協議には多くの時間を費やしたが、教員の専門性について力量の向上が見られた。 課題としては、教科・科目で目指す資質・能力や、評価規準等、教員間の足並みを揃え、共通理解を図ることが求められる。観点別学習状況の評価を反映した定期テストは、記述する問題が増えたため、配点、時間等を注意する必要がある。また、評価が迷った際に協議できる体制を構築していくこと及び実践事例の蓄積と共有方法については、学校を超えた取組が求められる。		
(3) 令和3年度研究実績		
時期	内容	備考
4月30日	■研究協力校訪問① (1) 校長懇談 (2) 教務主任、教科主任との打合せ	・趣旨説明・意向確認 ・1年間の研究計画書（案）の検討
6月22日	■研究協力校訪問② (1) 研究授業・授業検討会 (2) 教科主任との打合せ	・生徒のワークシート等を基に、観点別学習状況の評価の検討 ・実態把握・意向確認
7月～11月	○研究協力校における研究 ・観点別学習状況の評価を反映させた課題やテストを作成、検討 ・観点別学習状況の評価を総括的評価につなぐ方法を検討	・校内研修（観点別学習状況の評価の実践・分析・省察・評価規準の修正等） ・定期訪問（学習評価について）
1月18日	■研究協力校協議（Zoomによる実施） (1) 研究授業・授業検討会 (2) 研修主任懇談	・試行した観点別学習状況の評価の結果を基に協議 ・研究の振り返り
1月	校長懇談	挨拶・研究報告
(4) 令和3年度成果と課題 教務主任（商業科）、研修主任（数学科）、教育課程研究委員（商業科）の教員が先頭に立って熱心に研究、実践を行ったことで、学校全体の学習評価の考え方や方法等についての理解が深まった。教科を超えた協議では、カリキュラム・マネジメントの推進を図ることができた。 観点別学習状況の評価を反映したテスト問題を作成する際、多くの話合いの場が設定された。このような教員同士による問題の検討を通して、生徒に育成する資質・能力を確認する		

ことができた。また、この機会は自身の授業を振り返るきっかけとなり、授業改善につながった。

今までの評定の付け方と観点別学習状況の評価による評定の付け方を比較すると、観点別評価によって、評定が上がった生徒が8%、変わらない生徒が51%、下がった生徒が41%いた。これまでの指導における生徒に育成を目指す資質・能力に、偏りはなかったか考える機会となった。

主体的・対話的で深い学びの実践を意識した科目を受講した生徒は、例年に比べ多く、その専門分野へ進学を希望した。生徒の興味関心、学習意欲に向上が見られたことが推察できる。深い学びにつながる問いを設定することは、生徒の主体性を引き出し、個々の興味・関心に基づいた学習を促す成果となった。

課題としては、テストの返却時に、生徒からの信頼を失うことがないように、教員が生徒に評価規準を説明できることや学習改善につながる具体等を説明できることが今後求められる。

思考力・判断力・表現力等を育成する実践事例が少ないため、今後も学校を超えた事例（ワークシート・テスト等）の蓄積と共有が求められる。自校が目指す生徒像を明確化し、それに基づいて各教科等で育成を目指す資質・能力を明確化、具体化する姿勢が問われる。

5 今後の展望

知識・技術に偏重した授業から脱却し、学校が目指す資質・能力を育成するために観点を取り入れた課題等が定着していくものとする。本研究成果を基に、年次別研修等で学習評価への理解を深める。

図 20 浜松商業高等学校（商業科）研究報告

2 質問紙調査結果

以下に令和2年度及び令和3年度の質問紙調査（p6 図5「主体的・対話的で深い学び」とカリキュラム・マネジメントに関する調査）の結果を示す。これらについては、全ての研究協力校の教員から得られた回答を統合し、それらを基に算出したものである。よって、教科ごとにデータの傾向は、それぞれ異なることを予め御留意いただきたい。

令和2年度当初と令和2年度末の各質問項目の平均値は表1に示す結果となった。

表1 各質問項目の平均値比較（令和2年度）

質問	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
年度当初 (n=84)	4.38	4.05	4.32	4.20	4.62	3.94	4.56	3.95	3.79	3.69
年度末 (n=84)	4.51	4.25	4.42	4.42	4.88	4.26	4.65	4.21	4.10	4.19

質問	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳
年度当初 (n=84)	4.24	3.88	3.99	3.94	3.61	3.82	4.31	4.05	4.26	4.21
年度末 (n=84)	4.46	4.25	4.37	4.33	4.07	4.29	4.56	4.44	4.56	4.51

t検定（分散が等しくないと仮定した2標本による検定）により、令和2年度当初と令和2年度末の平均値に統計的な有意差が認められたのは、質問⑥「一人の力では解決が難しく、他者と協働しなければならないような課題（問い）を設定している。」（ $t=2.08$, $df=163$, $p<.05$ ）、質問⑨「複数の視点や立場から考え、比較、統合することで解決策や答えにつながるような材料を準備している。」（ $t=2.06$, $df=164$, $p<.05$ ）、質問⑩「生徒の対話を促進する教室環境（グループ編成や座席配置等）を整備している。」（ $t=2.70$, $df=166$, $p<.01$ ）、質問⑫「対話において、生徒同士の建設的なやり取りがなされるよう工夫している。」（ $t=2.45$, $df=166$, $p<.05$ ）、質問⑬「生徒が自ら学びを振り返り、自己の成長を把握するために、自分の言葉で表現させる場を設けている。」（ $t=2.39$, $df=166$, $p<.05$ ）、質問⑭「課題（問い）に取り組むことにより、得られた知識・技能の活用範囲が実社会や実生活まで広がることが想定できる授業になっている。」（ $t=2.60$, $df=165$, $p<.01$ ）、質問⑮「生徒が課題（問い）に対する授業開始時と授業終了時の考えをまとめる機会を設定している。」（ $t=2.88$, $df=166$, $p<.01$ ）、質問⑯「授業実施後に、生徒の課題（問い）に対するあらわれ（授業開始時・学習の過程・授業終了時）を比較・分析し、次の授業に生かしている。」（ $t=3.00$, $df=163$, $p<.01$ ）、質問⑱「一人ひとりが学びを深める大事な仲間であると思える学習集団をつくっている。」（ $t=2.64$, $df=166$, $p<.01$ ）、質問⑲「（所属校では、）校内研修により、教員全員で授業改善に取り組む風土がある。」（ $t=2.04$, $df=166$, $p<.05$ ）、以上10項目である。

令和3年度当初と令和3年度末の各質問項目の平均値は表2に示す結果となった。

表2 各質問項目の平均値比較（令和3年度）

質問	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
年度当初 (n=95)	4.75	4.39	4.48	4.42	4.71	4.13	4.48	4.34	4.05	3.92
年度末 (n=95)	4.51	4.24	4.37	4.46	4.59	4.05	4.51	4.25	4.11	4.00

質問	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳
年度当初 (n=95)	4.26	4.02	4.31	4.15	3.92	4.08	4.57	4.46	4.49	4.58
年度末 (n=95)	4.21	4.19	4.26	4.08	3.89	4.03	4.58	4.34	4.54	4.57

t検定（分散が等しくないと仮定した2標本による検定）により、令和3年度当初と令和3年度末の平均値に統計的な有意差が認められた質問項目はなかった。

令和2年度末の質問紙調査結果について、重回帰分析により質問項目ごとの関係性を分析した。その結果、質問⑩「授業実施後に、生徒の課題（問い）に対するあらわれ（授業開始時・学習の過程・授業終了時）を比較・分析し、次の授業に生かしている。」と正の相関を示したのは、質問⑦「授業実施前の設計段階において、課題（問い）に対する生徒の反応、対話や、答えについて想定している。」（ $r=0.51$, 95%CI=[.23, .79], $p<.01$ ）、質問⑭「課題（問い）に取り組むことにより、得られた知識・技能の活用範囲が実社会や実生活まで広がることが想定できる授業になっている。」（ $r=0.30$, 95%CI=[.02, .59], $p<.05$ ）であった。

質問⑮「「一人ひとりが学びを深める大事な仲間であると思える学習集団をつくっている。」と正の相関を示したのは、質問⑯「授業実施後に、生徒の課題（問い）に対するあらわれ（授業開始時・学習の過程・授業終了時）を比較・分析し、次の授業に生かしている。」（ $r=0.24$, 95%CI=[.05, .42], $p<.01$ ）、質問⑰「互いの間違いや失敗が許され、わからないことを積極的に言える雰囲気づくりを意識している。」（ $r=0.53$, 95%CI=[.35, .71], $p<.01$ ）であった。

質問⑱「（所属校では、）校内研修により、教員全員で授業改善に取り組む風土がある。」と正の相関を示したのは、質問⑯「授業実施後に、生徒の課題（問い）に対するあらわれ（授業開始時・学習の過程・授業終了時）を比較・分析し、次の授業に生かしている。」（ $r=0.23$, 95%CI=[.05, .42], $p<.05$ ）、質問⑳「（所属校では、）校内研修により、生徒主体の学びを大切にしようとする考え方を共有している。」（ $r=0.58$, 95%CI=[.40, .75], $p<.01$ ）であった。

質問㉑「（所属校では、）校内研修により、生徒主体の学びを大切にしようとする考え方を共有している。」と正の相関を示したのは、質問③「自校の生徒に育成すべき資質・能力を基に、教科で生徒に育成すべき資質・能力を具体化している。」（ $r=0.27$, 95%CI=[.03, .51], $p<.05$ ）、質問⑨「複数の視点や立場から考え、比較、統合することで解決策や考えにつながるような材料を準備している。」（ $r=0.25$, 95%CI=[.02, .47], $p<.05$ ）、質問⑱「（所属校では、）校内研修により、

教員全員で授業改善に取り組む風土がある。」($r=0.67$, $95\%CI=[.47, .87]$, $p<.01$) であった。

3 考察

令和2年度の質問紙調査の結果により、『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した授業設計診断の4項目」を授業改善のための共通言語（共通の視点）とし、教員の理解促進と実践化を進めることにより、「主体的・対話的で深い学び」の視点における指導と評価の一体的な改善に向けた教員の意識の高まりが確認された。令和2年度の年度当初と年度末の平均値に統計的な有意差が認められた質問⑥、質問⑨、質問⑩、質問⑫、質問⑬、質問⑮は、「解決したい課題や問い」「考えるための材料」「対話と思考」「学習の成果」のそれぞれの局面における指導のポイントを表している。

「主体的・対話的で深い学び」の鍵となるのは、まさに「解決したい課題や問い」の設定である。他者と協働しなくても解決できる課題や問いであるならば、対話の必然性は生まれない。複数の視点や立場から考え、比較、統合し、解決策を見付け、新たな価値付けをしていく、そのためにも「探究すべき価値のある問い」が設定できるかどうか極めて重要である。これまで少なからず見られた、「話し合い活動と称して中身の無いことを生徒たちがただ話し続けている」という「活動あって学びなし」の授業から脱却していかなければならない。この点について、教員の理解と実践化が進んだことは非常に大きな意義を持つ。

また、質問⑩、質問⑫、質問⑮における回答の平均値に統計的な有意差が認められたことについては、生徒の協働的な学びを促そうとする過程で、必然的に、「互いの意見を尊重し合える教室文化を醸成していくことが不可欠となる」という気付きが教員の中に生まれたのではないかと解釈できる。研究協力校の多くの教員が、知識を伝達することのみに特化した授業ではなく、「主体的・対話的で深い学び」の実現を意識した授業を実践していることを裏付けたデータであると捉えることもできる。

質問⑮については、生徒の表れを比較・分析し、次の授業に生かしているかどうかを問うものであった。この点について、本研究を通して教員の理解と実践が進んだことが数値で示された意義は極めて大きい。なぜなら、令和4年度から年次進行で始まる新学習指導要領の実施に伴った観点別学習状況の評価の本質がここにあるからである。学習評価改善の方向性として、学習評価が「生徒の学習改善につながるものであること」、「教師の指導改善につながるものであること」と示された（「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（初等中等教育局長通知）」（以下、「改善等通知」という。）。現在、観点別学習状況の評価の実施について、各学校が具体的な準備を進めている。実施上の難しさもあるかもしれないが、我々は、生徒の表れから授業改善ができる教員集団にさらに成長していけるのである。本研究結果が学校改革を進める教員の背中を強く押すものであることを強く願う。

質問⑨については、本研究が教科を核として進めてきた性質を鑑み、教科内カリキュラム・マネジメントが促進されたと捉えることとする。質問紙調査の自由記載欄には、「これまで、どちらかと言えば、事務的な連絡の伝達が多かった教科会が、質・量ともに充実してきた」等の記載が見られた。教科集団が、授業改善という目的を一にしたチームとして機能し始めたことは大いに評価すべきところである。他方で、質問③や質問④に見られるような、教科として

生徒に育成すべき資質・能力を具体化し、単元目標を設定することについて、これらの取組が促されたことが数値的な成果として明白に示されなかったことは課題として受け止める必要がある（質問③ $t=0.71$, $df=159$, $p=n.s.$ ）（質問④ $t=1.59$, $df=161$, $p=n.s.$ ）。これについては後述する。

令和3年度当初と年度末の各質問項目の平均値に統計的な有意差が認められなかったことについては、本質問紙調査が教員の自己評価を対象としている性質上、様々に解釈されうるものである。令和3年度当初の平均値は、令和2年度当初の平均値と比べて全体的に高くなっている。令和3年度は令和2年度の成果をある程度維持することができたと捉えることもできるかもしれないし、平均値の向上を阻害する何かしらの要因があったのかもしれない。これについては後述する。このような多様な解釈の中で、最も妥当であると考えられるのは、教員の学びの深まりと意識の高まりに起因する自己評価の厳格化である。つまり、研究初年度は、多くの教員にとって目新しい概念や実践の具体について初めて触れることで、理解と実践化への意欲の高まりがみられた。しかし、研究2年目を迎え、それらについてさらに理解が深まり、実際の授業で実践し、生徒の表れを検証する過程を経ることで、教員が自分自身の実践を厳しく評価することにつながっていったのかもしれない。具体的には、自分自身で設定した問いが生徒の協働的な学びや深い学びにつながらなかったことで、「解決したい課題や問い」を設定することが想像以上に難しいことであると感じたり、「学習の成果」として想定していた生徒の表れが、実際には全く異なっていたりという経験をされた教員が多かったのではないだろうか。事実、令和3年度の質問紙調査の自由記載欄には、教員が自分自身を内省する内容のものが明らかに増加している。研究の進捗とともに、教員が自分自身に、あるいは教科集団に求めるものが大きくなっていくことは、一方で、積極的なアウトカムとして捉えるべきものであるかもしれない。

さて、回帰分析により質問⑩と質問⑦及び質問⑭に正の相関が認められたことについて考察する。ここで大変興味深いのは、「生徒の学びが実社会や実生活に生かされるような授業構想をすることのできる教員ほど、生徒の表れを事前に想定しようとする」とともに、生徒の実際の学習成果を授業改善に生かしていこうと志向する」傾向にあることが示唆されたことである。言われてみれば当然のことであるかもしれないが、このような授業構想ができる教員は、生徒の変容が純粋に楽しみなのではないだろうか。もちろん、答えが一つに収束する問いに向かわせることも教育では必要である。しかし、「実社会や実生活の中で多くの人々が解決したいと望んでいるのに、何らかの問題があって解決には至っていない」、そのような課題や問いを生徒に与えられる教員だからこそ、生徒の多様な表れを期待し、楽しみ、認め、励まし、そのような過程を通して授業改善を進めていくことができるのだろう。学習評価の改善の方向性は先述したとおりだが、この意味において、「観点別学習状況の評価を真に意味あるものにするための根幹は『主体的・対話的で深い学び』の視点における不断の授業改善にある。」この点について疑う余地はないであろう。

質問⑩と質問⑭及び質問⑰に正の相関性が認められたことについては、次のような示唆として受け止めることができるのではないだろうか。すなわち、「学習評価の本質とは生徒を数字で区別するものではない」ということについて理解が深い教員ほど、より良い教室文化を醸成しようと志向する傾向にあるということである。もちろん、学習評価に関して、教務的な妥当

性、信頼性のある成績処理システムの構築は必要不可欠である。しかし、その目的は生徒の資質・能力の伸長にほかならない。これまで、学習評価の充実に係る総合教育センター高等学校支援課の取組が「授業改善のための」という枕詞と共に実施されてきたのはこのためである。一人一人の発言が尊重される教室でこそ、生徒は協働的に学ぶことができる。そのような環境で、生徒の学びの質に高まりを期待するのは至極当然のことである。

質問⑭と正の相関を示した質問⑯と質問⑳については、教員が次のような気付きを得ることができたことを示唆するものではないだろうか。すなわち、『主体的・対話的で深い学び』の視点における指導と評価の一体的な改善を進めていこうとするならば、教員全体で取り組むことが必要不可欠である。」というものである。カリキュラム・マネジメントの中心に、「主体的・対話的で深い学び」の視点における指導と評価の一体的な改善が位置付けられているゆえんはここにあるのだろう。いくら声高にカリキュラム・マネジメントの必要性を叫んでみても、上述のような教員の気付きがなければ決して前に進むことはできない。

最後に、質問㉑と正の相関を示した質問③、質問⑨、質問⑱の関係性を見ていく。質問㉑が示すのは、「生徒主体の学びを大切にしようとする考えの共有」である。ここで注目すべきは、『主体的・対話的で深い学び』の視点における指導と評価の一体的な改善を教員がチームとして進めていく上では、各教科において、生徒に育成すべき資質・能力を明確化、具体化することが重要な役割を担う」という示唆を得たことである。学習指導要領改訂において、生徒が「何ができるようになるか」を明確にすることが強調された意味を改めて確認する必要がある。

V 研究のまとめ

1 研究の成果

各教科における成果と課題については、「IV 研究の内容」の「1 各教科における研究」を参照されたい。ここでは、研究の総括として成果を報告する。

各研究協力校の研究報告及び質問紙調査の分析により、『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した授業設計診断の4項目が指導と評価の一体的な改善に有用であることを示した。また、事象間の関係性を分析したことにより、『主体的・対話的で深い学び』の視点における指導と評価の一体的な改善を図るためには、カリキュラム・マネジメントの視点が欠かせないであろうこと、「カリキュラム・マネジメントを促進していく上では、生徒に育成すべき資質・能力の明確化を行うことが重要な役割を担っているであろうこと」、以上の示唆を得ることができた。新学習指導要領対応授業改善推進サポート研修、定期訪問、教科に係る希望研修等、本課が進めてきた各取組の意義が本研究により裏付けられたことになる。

質問紙調査における自由記述欄の記載から、指導と評価の一体的な改善は教員の個業では決して進められないことを実感した教員が多いことが明らかになった。これは質問紙調査の数値的なデータの傾向とも一致するところである。教員のこの気付きは、今後の教育改革を進めていく上で必要不可欠なものであると考える。観点別学習状況の評価の実施に際し、ルーブリック評価の妥当性や信頼性の向上について関心を持つ教員が非常に多いと感じている。「改善等通知」では、これまでの学習評価の課題として、「教科によって評価の方針が異なり学習改善につなげにくい。」ことが指摘された。本研究で示されたように、カリキュラム・マネジメントの意義を理解している教員集団（チーム）にこそ、教員間で評価の方針を共有し、生徒の表

れを基に授業改善のための具体を共に創り上げていく姿を期待することができる。今後、求められるのは、単元や題材など内容や時間のまとまりを通して育成すべき資質・能力が明確化され、それらが生徒にとって分かりやすい言葉で事前に示されることである。そして、教員によって評価の方針が大きくずれることがなく、生徒に学習改善のための具体的なフィードバックが与えられるということである。そこでは、教科に属する教員がチームとしてベクトルを揃えていることを生徒たちが敏感に感じ取り、安心して学習に取り組むことができるだろう。それが学校に対する大きな信頼につながっていくであろうことは間違いない。

2 今後の課題

今後の課題として以下の2点が挙げられる。

1点目は、生徒に育成すべき資質・能力の明確化、具体化を促進していくことである。全教科の教員から得られた回答を統合し分析対象とした令和2年度、令和3年度のそれぞれの質問紙調査の結果からは、当該事項に関する取組状況の向上が数値的なデータとして示されなかった。新学習指導要領作成の根拠となった平成25年の第2期教育基本振興計画に、次のような指摘がある。『どのような成果を目指すのか』『どのような力の習得を目指すのか』といった明確な目標が設定され、その取組の成果について、データに基づく客観的な検証を行い、そこで明らかになった課題等をフィードバックし、新たな取組に反映させる検証改善サイクル（PDCAサイクル）が、教育行政、学校、学習者等の各レベルにおいて、必ずしも十分に機能していなかった。」また、平成29年度文部科学省委託調査によると、学習のねらいや評価の観点について、事前に児童生徒や保護者に伝えていない教師の割合は43.9%であると示している。このような実態を受け、「改善等通知」では、「どのような方針によって評価を行うのかを事前に示し、共有しておくことは、評価を行う妥当性・信頼性を高めるとともに、児童生徒に各教科等において身に付けるべき資質・能力の具体的なイメージを持たせる観点からも不可欠である。」と示した。すなわち、生徒に育成すべき資質・能力が明確に設定できてはじめて（Plan）、その目標を達成するための授業を実施することができるのであり（Do）、その上で、授業を通して目標が達成されているかどうかを検証し（Check）、検証結果を基に、アクションプラン、すなわち改善策を講じていくことができるのである（Action）。

このように考えると、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す際に、まず前提となるのは、生徒に育成すべき資質・能力の明確化、具体化を図ることにほかならない。学びの主体は生徒である。各教科・科目において、目指す学校像や生徒の実態に即した目標を設定し、それらが生徒に分かりやすい言葉で事前に示され、共有されて初めて、学習過程の質的改善を図る必然性が生まれるのである。今回の研究により、『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した授業設計診断の4項目」を共通言語（共通の視点）とし、教員の理解促進と実践化を図ることで「主体的・対話的で深い学び」の視点における指導と評価の一体的な改善が促されることが示された。しかし、これらの取組が、明確化された生徒の資質・能力の向上を期して行われたものであったということを当研究の質問紙調査の分析からは示すことができなかった。統計分析により明らかになった事象間の関係性を考慮すると、このことが令和3年度の質問紙調査における各質問項目の平均値に、統計的な有意差が認められなかった一つの要因であると考えられるであろう。強調したいのは、生徒に育成すべき資質・能力の明確化、具体

化をより進めることが、「主体的・対話的で深い学び」の視点における指導と評価の一体的な改善のさらなる充実につながっていくのではないかということである。『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した授業設計診断の4項目」は、目的ではなく手段である。目的は、生徒にこれからの時代を生き抜く資質・能力を育成することにほかならない。「主体的・対話的で深い学び」の実現のために非常に有用な手段である「授業設計診断の4項目」は、目的がしっかりと理解され、共有されることで、さらに大きな力となるはずである。

高等学校支援課では、この研究に基づき作成した令和3年3月と令和3年11月にそれぞれ「学習評価の参考資料」を公開した。令和3年11月版では、特に、学習指導要領に基づいて、各学校が目指す学校像や生徒の実態に応じて資質・能力を明確化し、形成的評価を充実させながら、それらを観点別に評価していくプロセスを示した。令和4年度以降の定期訪問や各種研修等において、この点について周知、徹底を図っていくことで、各学校における「主体的・対話的で深い学び」の視点における指導と評価の一体的な改善がさらに促進されることが期待される。

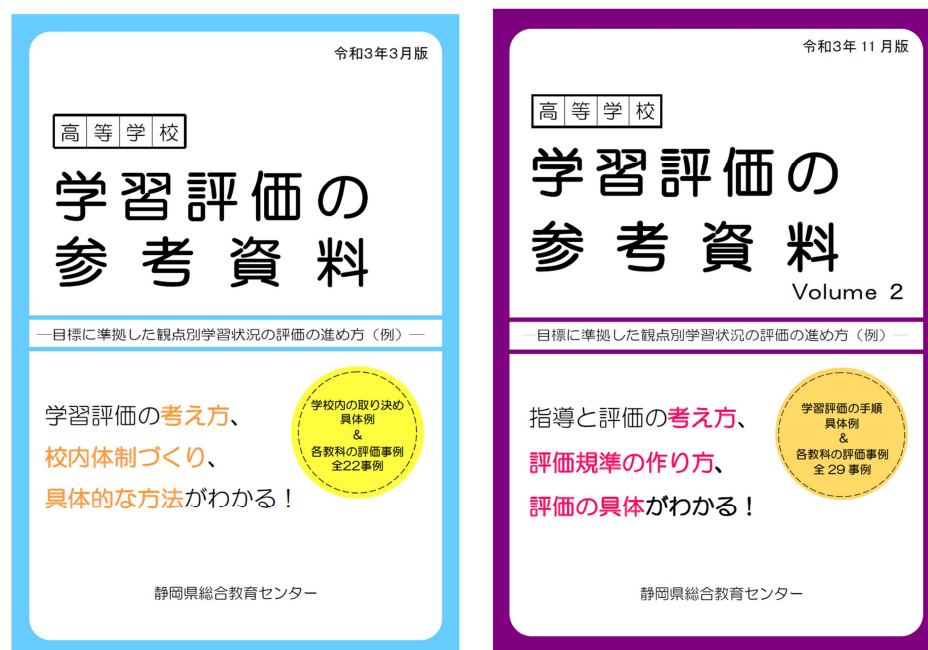


図 21 高等学校学習評価の参考資料

2点目の課題は、授業実践により、生徒の資質・能力がどれほど伸長したのかという教育データの収集と、それに基づいた授業改善というサイクルを確立することである。文部科学省中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』では、「令和の日本型学校教育」の構築に向けた今後の方向性として、次のように示している。「可視化が難しかった学びの知見の共有やこれまでにない知見の生成（例えば、教育データの収集・分析により、各教師の実践知や暗黙知の可視化・定式化や新たな知見を生成すること、経験的な仮説の検証や個々の子供の効果的な学習方法等を特定すること）」、「これまでの実践と ICT とを最適に組み合わせることで、これからの学校教育を大きく変化させ、様々な課題を解決し、教育の質の向上につなげていくことが必要である。その際、PDCA サイクルを意識し、効果検証・分析を適切に行うこ

とが重要である。」このように、経験論のみに依拠するのではなく、エビデンスに基づいて授業改善を進めていくことが強調されている。教員のいかなる取組も、その目的は生徒の資質・能力の向上にあるはずである。同答申では、「ICTはこれからの学校教育に必要不可欠なものであり、基盤的なツールとして最大限活用していく必要があるが、その活用自体が目的ではないことに留意が必要である。」とも述べているが、ICTを授業で活用することで生徒に育成すべき資質・能力のどの部分が有意に伸長したのか、あるいはしなかったのかについて検証していく必要がある。このプロセスを通して初めて、どの場面でICTを使うことが効果的なのか、あるいは使う必要はないのか（アナログの方が効果的なのか）がはっきりと見えてくるのである。この点についての知見を積み重ねることなしには、生徒の資質・能力の伸長が真に期待できるかどうかは別として、次々に生まれてくるアプリケーションの使い方が紹介されるに留まることになるであろう。もちろん、生徒の資質・能力の向上に関するデータを収集することには難しさもあるが、新しい令和の時代、そしてポストコロナ時代を迎え、「とにかくICTを使ってみましょう」というところから、教育分野の研究の在り方も新しいフェーズに入らざるを得ないのかもしれない。

【参考文献】

- 初等中等教育局長通知 『小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）』 2019
- 総合教育センター 『高等学校 学習評価の参考資料 令和3年3月版』 2021
- 総合教育センター 『高等学校 学習評価の参考資料 Volume 2 令和3年11月版』 2021
- 総合教育センター 『「主体的・対話的で深い学び」実現のためのサポートブック』 2019
- 文部科学省 『高等学校学習指導要領』 2018
- 文部科学省 『第2期教育基本振興計画』 2013
- 文部科学省 『文部科学省委託調査』 2017
- 文部科学省中央教育審議会答申 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』 2021

【研究組織】

研究協力校 富士宮東高等学校
浜松大平台高等学校
御殿場南高等学校
清水南高等学校
小笠高等学校
浜松西高等学校
富岳館高等学校
浜松湖東高等学校
静岡中央高等学校
浜松南高等学校
静岡高等学校
磐田農業高等学校
浜松城北工業高等学校
浜松商業高等学校

研究担当所員	総合支援部高等学校支援課	課長	伊藤 直美	(令和2年度)
		課長	大野 達雄	(令和3年度)
		1 班班長	小雀 浩一郎	(令和2年度)
		1 班班長	塚本 裕之	(令和3年度)
		教育主幹	塚本 裕之	(令和2年度)
		教育主査	中谷 哲司	(令和2年度)
		教育主査	鈴木 彰洋	(令和2年度・令和3年度)
		教育主査	佐野 博己	(令和3年度)
		教育主査	岩野 隆	(令和3年度)
		教育主査	鈴木 智久	(令和2年度・令和3年度)
		教育主査	中嶋 康文	(令和2年度・令和3年度)
		教育主任	杉山 洋一	(令和2年度・令和3年度)

特任教官	土井 弘子	(令和2年度・令和3年度)
2 班班長	大野 達雄	(令和2年度)
2 班班長	芳岡 遵一	(令和3年度)
教育主査	芳岡 遵一	(令和2年度)
教育主幹	高橋 晴美	(令和3年度)
教育主査	高橋 晴美	(令和2年度)
教育主査	増田 雄介	(令和2年度・令和3年度)
教育主査	古谷 桂吾	(令和3年度)
特任教官	松本 泉	(令和2年度)
特任教官	下鶴 一浩	(令和3年度)
3 班班長	平井 光裕	(令和2年度・令和3年度)
教育主幹	水田 忍美	(令和2年度)
教育主幹	望月 達彦	(令和2年度・令和3年度)
教育主幹	池谷 恵一	(令和3年度)
教育主幹	香月 菜穂子	(令和3年度)
教育主査	香月 菜穂子	(令和2年度)
教育主幹	富士盛 伸重	(令和3年度)
教育主査	富士盛 伸重	(令和2年度)
教育主査	朝比奈 玲子	(令和2年度・令和3年度)